

2014 年度海外集合研修報告書



関西大学図書館

嶋田 有理香

関西学院大学図書館

魚住 英子

同志社大学図書館

山本 祐実

(大学 50 音順、3 大学 3 名)

目次

I. 概要	2
II. 事前準備	4
III. 報告	5
1. The University of Hong Kong, HKU (香港大学)	5
1.1. HKU Libraries	5
1.2. JULAC Collaboration	14
1.3. Library Support Teaching, Learning and Research.....	19
1.4. Digitization at HKUL.....	23
1.5. HKU Scholars Hub	25
2. The Hong Kong Polytechnic University, PolyU (香港理工大学)	27
3. Hong Kong City University, CityU (香港城市大学)	38
4. The Hong Kong University of Science and Technology, HKUST (香港科技大学)	44
IV. 謝辞	57

1. 概要

1. テーマ「JULAC8 大学と香港における大学図書館間協力」

香港には、The Joint University Librarians Advisory Committee (JULAC)と呼ばれる、香港主要 8 大学の図書館間協力を促進するための組織がある。その中の 4 大学の図書館を訪問し、共同書庫建設計画をはじめ、香港における図書館間協力の成果や、それぞれの大学の電子資料への対応や利用教育に対する取組みを学ぶ。

2. 訪問機関

(1) 香港大学 The University of Hong Kong (HKU)

大学 URL <http://www.hku.hk/>

図書館 URL <http://lib.hku.hk/>

(2) 香港理工大学 The Hong Kong Polytechnic University (PolyU)

大学 URL <http://www.polyu.edu.hk/web/en/home/index.html>

図書館 URL <https://www.lib.polyu.edu.hk/>

(3) 香港城市大学 City University of Hong Kong (CityU)

大学 URL <http://www.cityu.edu.hk/>

図書館 URL <http://www.cityu.edu.hk/lib/>

(4) 香港科技大学 The Hong Kong University Science and Technology (HKUST)

大学 URL <http://www.ust.hk/>

図書館 URL <http://library.ust.hk/>

3. 日程

期間：2014 年 11 月 24 日（月）～11 月 29 日（土）

- | | | |
|-------------------|-------------|-------------------------------------|
| 1 日目：11 月 24 日（月） | 10：00～13：25 | 関西国際空港から香港国際空港 |
| | 16：00～17：30 | 香港大学図書館訪問
図書館見学
オリエンテーション |
| 2 日目：11 月 25 日（火） | 10：00～15：00 | 香港理工大学図書館訪問
図書館見学
講義・ディスカッション |
| 3 日目：11 月 26 日（水） | 9：00～17：00 | 香港大学図書館訪問
講義・ディスカッション |
| 4 日目：11 月 27 日（木） | 10：00～15：00 | 香港城市大学図書館訪問
図書館見学
講義・ディスカッション |
| 5 日目：11 月 28 日（金） | 10：00～15：00 | 香港科技大学図書館訪問
図書館見学
講義・ディスカッション |

6日目：11月29日（土） 11：30～12：30 香港大学図書館スタッフと昼食
16：35～21：00 香港国際空港から関西国際空港

II. 事前準備

1. 事前説明会

2014年10月31日（金）に関西大学（千里山キャンパス）総合図書館において、私立大学図書館協会国際図書館協力委員会事務局から研修日程や諸注意などの説明を受け、リーダーなど各自の担当、手土産、訪問先への質問事項、関係者連絡先、研修後の予定などを確認した。また、旅行会社JTBより、今後の航空券手配など、旅行日程や現地での留意事項の説明を受けた。

2. 事前調査

- 今回はレクチャーが4種と見学先が4図書館であり、報告書の執筆を一人あたりレクチャー1～2種と見学1～2図書館という分担とし、各自で概要を確認した。
- 手土産については、各大学グッズの中から選定し、清算は現地で行うこととした。
- 訪問先への質問事項については、香港大学への質問を一人あたり2件、その他の図書館への共通の質問を一人1件考えることとしてメールでのやり取りを進め、最終的にまとめた事項を参加者のプロフィールとともに、事前に事務局を通して訪問先に送付した。

III. 報告

1. The University of Hong Kong, HKU (香港大学)

1.1. HKU Libraries

香港大学¹ (以下 HKU) には、本研修の 1 日目と 3 日目の 2 回訪問することができた。1 日目は香港に到着した後、午後に約 1 時間半程度、図書館とキャンパス内を案内していただいた。3 日目は、4 つの講義と貴重書庫の見学、ライブラリアンの方々との質疑応答の時間を設けていただいた。

① 大学概要

HKU は、1912 年に Arts, Engineering, Medicine の 3 学部で開校した。現在はこの他に 7 つの学部 (Architecture, Business and Economics, Dentistry, Education, Law, Science, Social Sciences) を有し、約 27,400 名の学生 (学部生 15,500 名、院生 12,000 名) と教職員約 7,000 名を擁する総合大学である。学生の 3 分の 1 以上 (約 9,600 名) は中国大陸と海外からの学生で、毎年約 1,100 名の交換留学生を受入れている²。また、卒業生は 2014 年 6 月時点で 175,689 人を数える³。



Main Campus の周囲にそびえ立つ高層ビル



キャンパス内に繋がる HKU Station (11月訪問時建設中)

キャンパス内に繋がる地下鉄の HKU Station (香港大学駅) は、訪問時には建設中であったが 2014 年 12 月に開通した⁴。

¹ 2013 年度訪問者による HKU の詳細な報告は、「2013 年度私立大学図書館協会海外集合研修報告書」p.24-28 を参照のこと http://www.jaspul.org/ind/asset/docs/shugo_report2013.pdf [accessed 2015.2.11]

² 数字は Deputy University Librarian (副図書館長) Dr. Y. C. Wan 氏からの説明による。

³ HKU, "Quick Stats 2014" <http://www.cpao.hku.hk/qstats/graduate-profiles> [accessed 2015.2.11]

⁴ MTR Corporation Limited (香港鐵路有限公司)

<http://www.mtr-westislandline.hk/pdf/multimedia-gallery/press/PR-14-130-E.pdf> [accessed 2015.1.18]

② 図書館概要

図書館は、Main Library(約 24,124 m²)と 6つの専門図書館(Dental, Medical, Education, Music, Law, Chinese) から成る。うち、Chineseは Fung Ping Shan Library という名称で Main Library の 5,6/Fに位置する。

専門図書館は、該当の各学部を主要な利用対象として各専門分野の資料を所蔵しており、今回の研修では Main Library の他に Law と Music の 2つの専門図書館も見学することができた。Law Library には立ち机 (=写真左) があるが、これは当初の計画では通常の閲覧席を配置する予定であったという。しかし防火シャッターを設置する都合上、椅子を置くスペースが確保できずに苦肉の策として立ち机を置くことにしたところ、何時間も立ったまま利用する学生が多く、意外な人気に驚いたとのことであった。また Music Library には、音楽科を対象とする図書館らしく楽譜が作曲家の名前順に並べられている。



Law Library の立ち机



Music Library

2013/14 年における図書館の registered users (学生、教職員を含む) は 129,293 名 (うち 54,982 名は卒業生) である。入館のみか資料の貸借や一部電子資料へのアクセス権限など、享受できるサービス内容等によって異なる年間登録料を課しているそうである。

蔵書数は図書約 299 万冊、雑誌約 6,500 タイトル、電子ブック約 350 万冊、電子ジャーナル約 11 万 3,000 タイトル、データベース約 869 である。また、HKU Scholars Hub (機関リポジトリ) と 29 の自家製データベース (所蔵コレクションをデジタル化したもの) も有する⁵。

他にも、Off-campus high density storage (資料の配架方法により変動するが、収容量は約 100 万冊ですすでに満杯とのこと) があり、Main Library や各専門図書館から申込みば 24 時間以内にその所蔵資料を取寄せることができる。

Main Library 各階の主な構成は以下のとおり (分類はデューイ十進分類法を採用)。

- G/F (日本の 1 階に相当する)
 - ・ 6 類の図書、大型本
 - ・ Leisure Reading Collection (ベストセラー、旅行ガイド、小説など)

⁵ 数字は Deputy University Librarian (副図書館長) Dr. Y. C. Wan 氏からの説明による。

- **Po Chun's CEO Collection**

香港初の国際航空会社 DHL Hong Kong の創設者 Chun Po Yang (Po Chun) 氏から寄贈された個人コレクションやビジネス・経営、リーダーシップに関する図書が並ぶ。

- **1/F**

- **新聞、5類、7類の図書**

- **AV 資料**

DVD、VCD が並ぶ。申込みなしで自由に視聴でき、貸出もしている。グループで AV 資料を視聴できる Discussion Room (30 分 1 コマで最大 4 コマ (=2 時間) まで) はオンラインで予約可能。利用の際はカウンターでの受付は不要で、カードで入室することができる。



AV 資料を視聴できる閲覧席



Microform Room



The University Archives

- **Reserve Collections**

教員が指定した資料など。通常より短い数日～1 週間の貸出期間を設定している。

- **Special Collections**

西洋の貴重書（中国や東洋の貴重書は 5,6/F に位置する Fung Ping Shan Library にある）やその貴重書閲覧室、Hong Kong Collection（香港政府の刊行資料、香港の著者による資料など）など。

- **Microform Room**

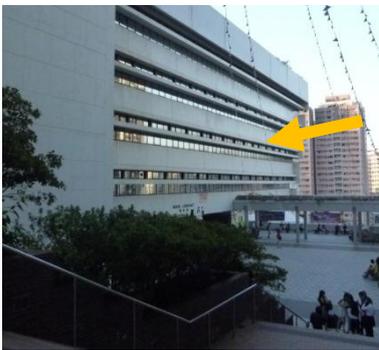
利用者は自由に入入りし、備え付けられている機械でマイクロ資料を閲覧、スキャンすることができる。

- **The University Archives**

香港大学関係資料を所蔵する部屋。修士・博士論文はリポジトリだけでなく、ここで

冊子体も保存している。機密性の高い文書もあるため、学生の入室には予約申込みが必要。

- 2/F 雑誌、参考図書、4類、8～9類の図書
- 3/F Level3
Old Wing（旧棟）と New Wing（新棟）が繋がったワンフロア全体を占めるラーニング・commons。詳細は「③ラーニング・commons概要」を参照。
- 4/F 0類～3類の図書



Main Library 外観



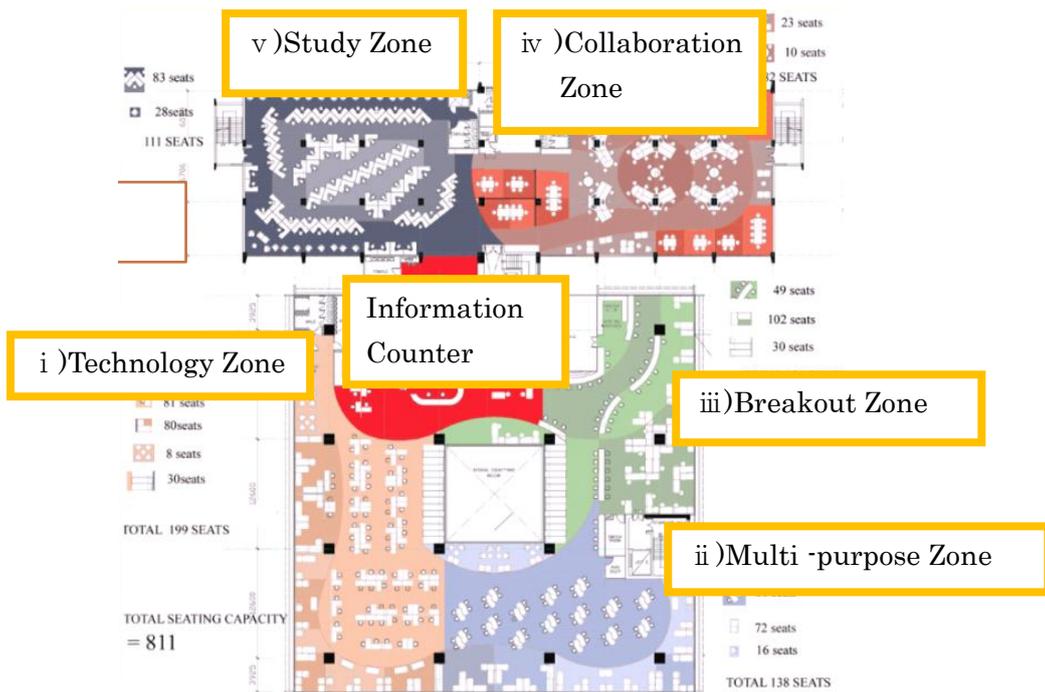
Main Library のエントランス

職員は 216 名、うち 34 名が Professional Librarian（以下、Professional）で図書館情報学などの修士号や博士号を取得している。Assistant Librarian（以下、Assistant）から Professional を目指して昇格するケースもあるが、Professional に欠員が出た場合には公募をかけている。また Assistant Librarian の中にも Junior や Senior といった区分があり、Senior の募集時には海外からも公募する。職務内容については、目録やサービスといった担当が変更になることは滅多にない。

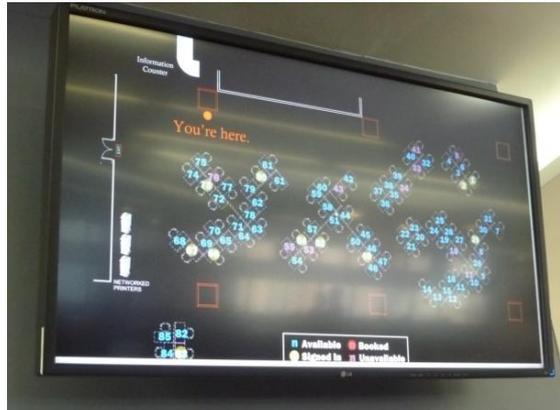
Assistant は A～F、Professional は G～J のランクがあり給与もこれに対応している。また、香港大学では 2006 年～2007 年頃に人事制度の改革があり、Assistant、Professional とともに終身雇用となる前に 6 年間の契約期間が設けられた。ただし日本の契約社員の制度とは趣が異なっているようで、雇用する側も優秀な人員が転職してしまわないような努力が求められる。

③ ラーニング・commons概要

図書館が運用する Main Library のラーニング・commons的学習空間”Level3”は 2012 年 1 月にオープンした。名称は、文字どおり 3rd floor（ただし日本の 4 階に相当する）に位置することから付けられている。Level3 は 5 つのゾーンに分けられており、中央に Information Counter が位置する。



Level3 の全体図（説明時の ppt にゾーン名を筆者が追加）



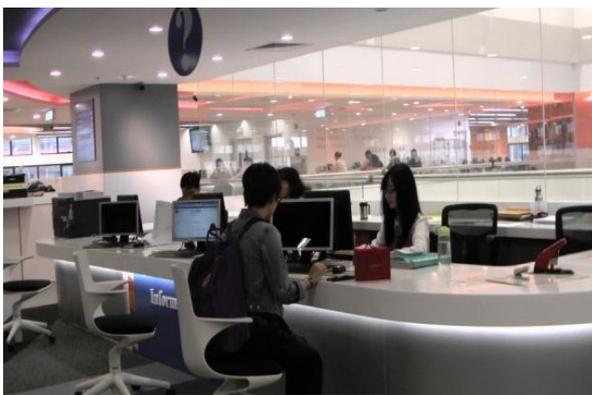
i)Technology Zone 約90台のパソコン（一部はスキャナ付き）があり、その予約状況を一瞥できるモニターも設置されている（=写真右）。また、オンラインで利用提供できないデータベース（金融関係と中国の歴史資料関係）専用のパソコン4台とプリンタも置かれている



ii) Multi-purpose Zone 可動式の机と椅子が設置された多目的ゾーン



iii) Breakout Zone テレビや自動販売機、所蔵登録していない新聞・雑誌がある休憩スペース。お菓子の自動販売機は夕方には空になることが多いという



Information Counter

Information ServiceとLending Serviceの各担当図書館員が基本2人1組でカウンター業務に従事する。学生スタッフは雇用していない



iv) Collaboration Zone

グループディスカッションのためのスペース。
19の小部屋もある



v) Study Zone 個人で学習するためのブースが並ぶスペース。24時間開室。

通常期はStudy Zoneのみ24時間開室、試験期間はCollaboration Zoneも24時間開室しており、全体の閉館後は警備員のみが勤務する。

また Level3 は、毎年 1 回開催する古本販売の催しにも活用されている。対象は複本あるいは毎年大量に受け取る寄贈図書で、1 冊 10 香港ドル（約 160 円⁶）で販売する。



Chi Wah Learning Commons



Student Lounge

図書館の管轄ではないが、学内には他にもCentennial Campus（100周年を記念して造られたMain Campusに隣接する新キャンパス）のChi Wah Learning Commons（=写真左）がある。ここは貯水庫を地下に埋めたことで空いたスペースに建てられている。また、学習スペースとして活用されているStudent Lounge（=写真右）という小部屋が学内のいたるところに点在するとのことである。

⁶ 三菱東京 UFJ 銀行 2014 年 12 月月間平均 TTS レート 15.83 円/HKD を用いて算出。
http://www.murc-kawasesouba.jp/fx/past_3month.php [accessed 2015.1.30]

④ 蔵書構築（電子/冊子の割合）

Collection Development Policy に基づき、6年間閲覧も貸出も全くされなかった資料は Storage（書庫）に移されることになっている。

図書費に占める電子資料費の割合

Year	% of Materials Budget
01/02	12%
02/03	21%
03/04	29%
04/05	42%
05/06	48%
06/07	50%
07/08	56%
08/09	59%
09/10&10/11	71%
11/12	76%
12/13&13/14	80%

電子と冊子の割合については、左の表に見られるとおり 2002/03 年には図書費予算の 2 割であった電子資料費が約 10 年の間で 8 割に増大している。この電子資料費とは図書・雑誌関わらず、電子媒体すべてを含む。

冊子の購入費用は、後で述べる HKALL という JULAC の相互利用の活用により抑えることができている側面もあるという。また、今後も電子に投入する費用は増えていくであろうし、増やしていかなければいけないということであった。

(説明時に見せていただいた ppt の数字をもとに、筆者が作成)

⑤ 学修支援

目録の見方、論文の調べ方、データベースや Endnote の使い方など、多くのワークショップを開催している。2013/14 年は 550 以上のワークショップを提供し、延べ 12,500 名以上が参加している (e-learning ではなく、実際に来館して受講した人数)。詳細は、1.3 Library Support Teaching, Learning and Research の項目で説明する。

⑥ その他

Main Library には予約本や HKALL（香港の 8 大学による相互利用の仕組み。詳細は 1.2JULAC Collaboration で紹介）の取寄本を、申込者の名前順に並べた書架がある。これは利用者が申し込んだ資料が、この書架に準備できるとメールで到着の通知を行い、1 週間程の取置期間中に申し込んだ資料を利用者自身が取出す仕組みである。

次の写真のとおり、書名などの目隠しに、資料には専用のカバーをかけて輪ゴムで止めている。書架はカウンターの近くに設置されているものの、カバーを外してしまえば誰がどの資料を申し込んだのか簡単にわかってしまうという難点があるが、セルフサービスを追究した仕組みとして興味深い。



書名などを隠すカバーを付けた資料が
申込者の名前順に並ぶ



書架の横に設置されたカバーと輪ゴムの回収箱

また、資料の貸出・返却には自動貸出機が導入されていたが、利用するにはカードだけでなくパスワードの入力を必要とするため、カードを紛失しても他の人が悪用して資料を貸出することができない仕組みであった。

⑦ 所感

Level3には800以上の座席があり、訪問前より、立派な施設であると写真で見て感じていた。見学してみてその広さを実感したが、学習スペースはまだ足りないそうである。実際、試験期が近づいていたこともありLevel3はフル稼働とあってよい状態でほとんどの席が学生で埋まっていた。学習スペースをどのように（またどこまで）確保するかという問題を始め、限られた図書費の有効活用や書庫の狭隘化、人員（図書館員）の確保・スキルアップなど、日本の大学図書館が抱える主要な課題を我々同様に認識して取り組まれているライブラリアンの方々と交流できたこと、また筆者が今まで知らなかった、予約棚から利用者自身が資料を取出すサービスも知ることができたことなど、貴重な時間を過ごした。

1.2. JULAC Collaboration

講師： Mr. Peter Sidorko, University Librarian

香港における大学図書館間の協力を語る上で JULAC⁷ (Joint University Librarians Advisory Committee) は欠かせない。JULAC は 1967 年の設立当初は主に意見交換のためのフォーラムであったが、徐々に発展し、各大学図書館の資料やサービスをいかに共有し、協同で活用していくかを主眼として活動するようになった。政府、正確には UGC (University Grants Committee、大学補助金委員会) から資金を受けている香港の下記 8 大学の図書館で構成されており、そのすべての学生とスタッフがクライアントであるという認識に立っている。ただし、政府資金を得てはいるが JULAC の大学にも自己資金で賄う Self-fund program があり、学生の要望・需要に、より合致したコースを提供しているそうだが、政府の資金は得られないため学生にはより高い授業料が課せられる。

- ① University of Hong Kong, HKU (香港大学)
- ② HK Polytechnic University, PolyU (香港理工大学)
- ③ City University of Hong Kong, CityU (香港城市大学)
- ④ HK University Science & Technology, HKUST (香港科技大学)
- ⑤ Chinese University of Hong Kong, CUHK (香港中文大学)
- ⑥ HK Baptist University, HKBU (香港浸会大学)
- ⑦ HK Institute of Education, HKI Ed (香港教育学院)
- ⑧ Lingnan University, LU (嶺南大學)

8 大学は約 1,000km² 圏内 (大阪府の面積⁸約 1,900km² の半分程度の広さ) に散らばっており、本研修では、①～④の 4 大学を訪問した。また 2014/15 年の世界大学ランキング (Quacquarelli Symonds (QS) World University Rankings⁹と The Times Higher

⁷ JULAC ホームページの URL: <http://www.julac.org/> [accessed 2015.1.18]

2013 年度訪問者による JULAC の報告は、「2013 年度私立大学図書館協会海外集合研修報告書」p.16-19 を参照のこと http://www.jaspul.org/ind/asset/docs/shugo_report2013.pdf/ [accessed 2015.2.10]

⁸ 国土交通省国土地理院「平成 25 年全国都道府県市区町村別面積調」
<http://www.gsi.go.jp/KOKUJYOHO/MENCHO/201310/ichiran.pdf> [accessed 2015.1.18] 大阪府の面積 1,901.42km² より。

⁹ <http://www.topuniversities.com/university-rankings/world-university-rankings/2014> [accessed 2015.1.18] イギリスの QS (Quacquarelli Symonds) 社が実施。世界の大学 3,000 校以上を査定し、うち上位 400 校について第○位という個別のランキングで評価。6 つの判断項目とその割合は次のとおり。Academic Reputation (学問分野別の研究者からの評価) 50%、在籍学生数に対する教員数 20%、教員の論文引用数 20%、Employer reputation (雇用者の評価) 10%。全体に占める外国人学生数と教員数の割合も各 5% が全体の結果に反映される。詳細はホームページ参照のこと。

<http://www.topuniversities.com/university-rankings-articles/world-university-rankings/qs-world-university-rankings-methodology> [accessed 2015.1.30]

Education World University Rankings¹⁰⁾ 50 位以内には次の大学が位置している（表は 50 位以内のアジアの大学）。

<p>Quacquarelli Symonds (QS) World University Rankings</p> <p>22 位 シンガポール国立大学</p> <p><u>28 位 HKU (香港大学、前年 26 位)</u></p> <p>31 位 東京大学、ソウル大学校</p> <p>36 位 京都大学</p> <p>39 位 南洋理工大学 (シンガポール)</p> <p><u>40 位 HKUST (香港科技大学、前年 34 位)</u></p> <p><u>46 位 CUHK (香港中文大学、前年 39 位)</u></p> <p>47 位 清華大学</p>	<p>The Times Higher Education World University Rankings</p> <p>23 位 東京大学</p> <p>25 位 シンガポール国立大学</p> <p><u>43 位 HKU (香港大学、前年同位)</u></p> <p>48 位 北京大学</p> <p>49 位 清華大学</p> <p>50 位 ソウル大学校</p> <p>-----</p> <p><u>51 位 HKUST (香港科技大学、前年 57 位)</u></p>
--	--

香港では 2012 年に、政府の教育方針によりすべての高等教育機関が 3 年制から 4 年制へ移行している。その結果、JULAC の 8 大学とも学部生数が 1 学年分つまり約 30%増加することになり、これに対応するため政府から資金が投入され学習スペースや IT 施設、食堂といった基礎設備の充実に充てられた。この際に各大学ではラーニング・コモنزの設置、改修なども行われている。

JULAC で行うプログラムは 8 大学中、6 大学の賛成により実行されるが、プログラム外でも、例えば目の不自由な学生が最も多い HKU と CityU の 2 大学の図書館だけで目の不自由な人向けの電子ブックのデータベース作成を検討するといった協同作業が行われている。各大学の JULAC Director が集う JULAC Directors meeting は年 4 回開催され、その下に次の 12 の委員会が構成されている。

- ① Access Services Committee (アクセスサービス委員会)
- ② Consortial (この後の「資料の構築」の項目で説明)
- ③ Bibliographic Services Committee (文献サービス委員会)
- ④ JURA Working Group (この後の「資料の共有」の項目で説明)
- ⑤ Statistics Committee (統計委員会)
- ⑥ Learning Strategies Committee (学習戦略委員会)

¹⁰⁾ <http://www.timeshighereducation.co.uk/world-university-rankings/2014-15/world-ranking> [accessed 2015.1.18] イギリスの THE (Times Higher Education) が実施。5 つの判断分野とその割合は次のとおり。教育 (研究者からの評価、在籍学生数に対する教員数など) 30%、研究 (研究者からの評価、研究収入など) 30%、論文引用数 (研究の影響度) 30%、商業収入 (産学連携による研究収入) 2.5%、国際色 (外国人学生、教員数の比率や海外研究者との共著による学術誌の割合) 7.5%。詳細はホームページ参照のこと。

<http://www.timeshighereducation.co.uk/world-university-rankings/2014-15/world-ranking/methodology> [accessed 2015.1.30]

- ⑦ Systems Committee (システム委員会)
- ⑧ Committee on Media (メディア関連委員会)
- ⑨ Copyright Committee (著作権委員会)
- ⑩ Staff Development Committee (スタッフ能力開発委員会)
- ⑪ Preservation and Conservation Committee (資料保存/保全委員会)
- ⑫ JULAC Project Manager

以下、JULAC の活動の柱と言える三つの取組み、「資料の構築」と「資料の共有」、そして「資料の保管」について紹介していきたい。

➤ 資料の構築

12 の委員会の一つ、「Consortia//」は資料、特に電子資料の購入に関するコンソーシアム活動を行い、現在 140 以上のコンソーシアムを結んでいる。例えば JULAC として共同で行う PDA¹¹ (Patron Driven Acquisition)。最近では JSTOR の電子ブック約 5 万冊のコレクションが各大学への目録に取り込まれた。JSTOR の PDA では、当該資料へのアクセス数が一定数に到達すれば購入することになり、8 大学図書館に提供される。また冊子においても、例えばアメリカの図書取次業者 YBP (Yankee Book Peddler) に JULAC として交渉し、冊子図書的大幅な割引を獲得している。その他に、規模は小さいが香港にも私立大学があり、JULAC 以外の香港とマカオの 15 の加盟館に対して特にデータベースの共同購入を推進しているという。

投入する価格に対して購入できる冊数、つまり費用対効果は冊子よりも電子の方が圧倒的に大きく、今後も電子資料の購入を増加していくという。この方向性を可能にしているのは、現在 CUHK (香港中文大学) 以外の JULAC の大学で大半の授業が英語で行われているという点が大きいであろう。目下のところ、洋書を中心に展開されている電子資料の購入が学修に供する資料の充実につながっているのである。

➤ 資料の共有

学部生以上であれば、JULAC の 8 大学図書館のいずれにも入館することができる。入館時などに利用する JULAC のライブラリーカードは、例えば HKU は学部生、院生ともに発行料を課金し、PolyU は学部生のみ 50 香港ドル (約 800 円¹²) を課すが大学院生は無料とするなど、各大学で定めたルールで運用している。

¹¹ HKU Sidorko 氏の講義では PDA という言葉で説明されたが、1.4 HKUST (香港科技大学) 報告にある DDA (Demand Driven Acquisition) と基本的には同じ仕組みを指す。

¹² 三菱東京 UFJ 銀行 2014 年 12 月月間平均 TTS レート 15.83 円/HKD を用いて算出。
http://www.murc-kawasesouba.jp/fx/past_3month.php [accessed 2015.1.30]



HKU 図書館の
JULAC カード用入館機

各図書館で直接資料を貸借する等のサービスを利用する資格については制限がかかる場合がある。しかし HKALL (Hong Kong Academic Library Link) を利用すれば、学部生であっても図書を取寄せることができる。HKALL とは 8 大学図書館の共同目録システムで、アメリカの図書館システムベンダー III 社 (Innovative Interfaces Inc.) の「INN-Reach」というモジュールを用いている。共同目録であるため、タイトル数は 800 万以上、約 1,200 万冊の規模である。

利用者が HKALL から取寄せを申込みると、所属館を介さず直接その資料を所蔵する図書館で申込みが受け付けられ、通常翌日には利用者の所属館に図書が送られて利用することができる。HKALL には、入力された各館の所蔵冊数や貸出冊数など様々な条件を考慮して、なるべく偏りが生じないようどの館から取寄せを自動的に決定するシステムが構築されている。費用は図書館が負担するため利用者は無料で活用し、1 回につき 6 冊まで借りることができる。

HKALL は、当初 JULAC のプログラムではなく 3 大学 (HKU, CityU, LU) のみで連携して 2005 年に導入された。開始以前は約 12~13 万冊で横ばいであった図書館間の貸出冊数は、2010 年までの 5 年間で 311% (最大 55 万冊台) まで跳ね上がった後、2011 年から 2013 年までの 3 年間で 33% 減少している。これは電子資料が増加した影響で、今後も利用は電子に移行していくだろうということであった。

➤ 資料の保管

JULAC で進められているのは、JURA (Joint Universities Research Archive) と呼ばれる、低利用の資料を共有、保管するプロジェクトである。そのために 8 大学のおよその中間地点に建設予定の施設が、収蔵可能冊数 630 万冊 (フロアの増築により 995 万冊まで拡大可能) の巨大な共同書庫である。管理はプロジェクトを主導する HKU がおそらく行うことになるが、所有権は共同で持ちオペレーティング費用も分担する。

JULAC 全体で増加した冊子の合計冊数は 2002 年から 2013 年にかけて、割合としては 44% の減少がみられるものの、当然冊子を全く購入しなくなった訳ではない。ここ数年 (2011 年から 2013 年) で言うと毎年 27 万~28 万冊程度の冊子が追加されている。電子化は進んでいるが、香港の大学にとっても保管場所の確保は課題と言えるのである。JURA に保管する資料は各大学の基準で選択してよいことになっており、例えば HKU の場合は 6 年間一度も閲覧も貸出もなかった資料を入れる予定である。複本は認めないため、JURA への収蔵は先着順となる。JURA に所蔵されたことにより、複本を持つ館がそれを破棄するかどうかなどの判断は各図書館に委ねられる。

JURA の計画は、あとは政府の Capital Works Resource Allocation Exercise (CWRAE) から「B+」の評価を得るのを待つのみとなっている。前年に続き 2014 年 11 月の査定でも評価は「B-」であったが、審議リストのトップには挙がっているため来年の「B+」評価獲得を期待しているということである。



JURA の共同書庫完成イメージ図（説明時の ppt より抜粋）

ただし、CWRAE は年 1 回しか開かれないため、3 年計画の工事期間を含めて建設までに最短でも今後 4 年はかかる。その間にも各館の所蔵スペース不足は増していくため、将来的に JURA に収蔵するという前提で冊子雑誌の分担保存が 2014 年 5 月に開始されている。1 館しか所蔵していないタイトルについては当然その所蔵館が保存することになる。複数館が持つタイトルについては、原則最も所蔵する巻号の範囲が広い館が保存することになっているが、欠号や製本の質なども勘案する必要がある。また、同様の範囲を所蔵している場合には負担をなるべく公平にするため、小規模な館が保存することになる。このように様々な条件を勘案するため、単純な機械作業で選出するような方法がなく、タイトルレベルで保存館を検討、調整していく膨大な作業は避けられないという。

所感

JULAC は、公立の大学が一定範囲の中に集中している地理的特性を活かし、大学図書館間の協力という点で実現の可能性があるあらゆる方策に着手していると感じる。その地理的な要素や歴史、文化的背景などは異なるが、香港の取組みに学ぶべき点、また知るべき点が多いことを実感した。各大学にはそれぞれの特性や特に規模の違いがあり、負担が生じることはできる限り公平に分担できるよう努力していることも伝わってきた。

また、JULAC という単位で複数のプロジェクトを進める連携体制をとっているが、もちろん各大学を画一化しようとしているわけではなく、相互にメリットがあることについて手を組んでおり、各館の独自性を尊重している。図書館間の協力という点では、この連携部分と各館の独自性との折り合いを調整するさじ加減が肝心であると感じた。

1.3. Library Support Teaching, Learning and Research

講師 : Ms. Antonia Yiu , Head, Information Services

HKU の学修支援・利用教育は、Information Services Division (情報サービス部門) が担当し、7名の Professional Librarian と 6名の Library Assistant で構成されている。

HKU Libraries では”Mission”が明示されており、その Mission の下で学修支援・利用教育は展開されている。

Mission¹³

- ・図書館は、大学内の知的中枢機関として、HKU が国際的に優秀な大学であることに貢献する。
- ・大学教育を支えるために求められる情報源を確保・維持し、アクセスの促進を図る。
- ・情報源がよりアクセスしやすく、活用されやすくなるサービスを提供し、大学が必要とする教育、学習、研究、そして “Knowledge Exchange(知的交流)” を支える様々な環境を提供する。

当図書館の学修支援・利用教育は、主に院生向けに展開されている。学部生に対しては英語のサポート教員がおり、基本的な情報探索ツールの使用方法などについてはそこで教えてもらえる。

当講義では、学修支援・利用教育の取組みを「リソース」「サービス」「学習環境」の 3本の柱に分けて説明を受けたため、その流れに沿って報告していきたい。

➤ リソース

情報検索ツールとして、Primo のディスカバリーツールを 2013 年より導入している。学内で資料が入手できなかった場合には、HKALL という JULAC を構成する 8 大学間での、無料の資料貸借サービスが受けられる。それ以外にも、通常の ILL サービスもあり、香港では資料収集のための大学間連携サービスが充実していると言える。

また、2004 年より Turnitin という文書マッチングツールを導入している。論文間に同一の文章がどの程度あるかをマッチングすることができるツールで、学生が必要以上に他人の論文を引用したり、コピー&ペーストをしていないかどうかなど、剽窃を見抜くのに役立っている。

HKU からは多くの論文が生み出されている。伺った話によると、1 時間に 12 の論文が発表されている計算になるという。そのため研究論文の剽窃チェックにも力を入れており、この Turnitin が活用されている。2009 年より、修士・博士論文の中からいくつかを抽出チェックする方針がとられていたが、2011 年からはすべての修士・博士論文と、研究計画書の剽窃チェックをしている。

また、Turnitin の使い方を HKU の LMS (Learning Management System) である Moodle に掲載し、e-learning で学べるようにもしている。

¹³ 下記ホームページに公開されている Vision&Mission を簡単に和訳したもの。

<http://www.lib.hku.hk/general/vision.html> [accessed 2015.1.11]

このような取組みにより、教員や研究者の Turnitin 利用率は年々増加し、今では約半数の教員・研究者に利用されている。

Turnitin は、学生に対して課題を課す側の教員にのみメリットのあるツールに見えるが、実際は学生側にもいくつかメリットがある。例えば、剽窃をしないようにする意識を育むことや、逆に自分の書きたい内容と一致する論文を探し出し、先行研究調査を行うのにも役立っている。

➤ サービス

学修支援・利用教育のサービスとして、ワークショップの開催や、オンラインで学べるコンテンツの提供などを行っている。

① ワークショップ

利用者の多様なニーズに応えるため、平日だけでなく、夜間や土曜にも開催している。2013/14 年の統計によると、1 年間で 550 を超えるワークショップを開催しており、参加者は 12,500 名にも上る。中でも、その 550 回のうち 117 回はオーダーメイドで実施するワークショップである。これは全体の 21%にあたり、教員や学生の希望にオーダーメイドで対応することが非常に多いことがうかがえる。ワークショップの種類と概要は以下の通りである。

・ Orientation

館内ツアーを含めて 1 時間 15 分で実施している。最後にクイズを出し、答えられたらコーヒーカーポンをプレゼントしている。

・ Information Skills Training

館内ツアーや実習を含んだ 3 時間の院生向けのワークショップ、OPAC の使い方・雑誌記事の探し方・学位論文の探し方などを教える一般的なワークショップ、およびオーダーメイドワークショップの 3 種類を実施している。

オーダーメイドワークショップでは、学生や教員から要望があれば、授業課題などをヒアリングし、それに応じたワークショップを行っている。

・ Endnote Workshop

Endnote の基本的な使い方を教える基礎編と、より良い活用方法を教える応用編があり、とても人気のあるワークショップである。

・ Research Seminar

データベース会社によるデータベースの使い方のデモワークショップである。本の著者とのトークセッションなども実施している。

② オンライン提供サービス

・ Subject guide

学部・分野ごとにページを設け、Faculty Librarian の紹介、その分野で役立つデータベースや電子リソースの紹介、ワークショップの紹介や検索窓などが用意されており、それぞれのリンクに飛べるように作り込まれている。

・ Course materials

ワークショップで教えている内容は、ホームページ上に PDF の形で掲載されたレジュ

メからも学ぶことができる。

- e-learning

Moodleを使ってe-learningを提供している。授業のリーディングリストの活用方法や、資料の探し方、データベースの使い方などが学べる。今年はゲームを取り入れて、新入生や学部生が楽しみながら学べる工夫をしたいと話されていた。基本的にe-learningは自前で作成しているが、ゲームを組み込むなど高度な技術が必要な場合は、学生を雇って作成している。

③ 広報

ワークショップの広報はホームページのバナーや掲示以外に、TwitterやFacebookを活用して行っている。また、利用者に直接ワークショップの案内をメールで送ることもしている。すべての利用者に送るものもあれば、分野に応じて送り先を分けるものもある。しかし、HKUの各部署から毎日様々なメールが学生に送られるため、メールでの広報はあまり効果的ではない。どの広報が一番効果的だと思うかと尋ねたところ、友達などからのクチコミが一番効果的と回答された。

④ サポート

- WhatsApp

カウンター、電話、メールでの問い合わせ受け付けの他に、2014年からチャット形式で質問や相談ができるWhatsAppというサービスを取り入れて、利用者サポートの充実を図っている。

- 個人サポート

教員と院生向けに、マンツーマンで行う研究コンサルテーションサービスを行っている。希望者には一人に対し1時間の枠を設け、相談を受けたりアドバイスをしたりしている。

➤ 学習環境

Level3と呼ばれるラーニング・コモンズの学習空間を設け、学生の学習環境の整備に努めている。

最後に、スタッフディベロップメントについても話を伺ったので紹介したい。職員の能力開発のため国内・海外の研修に参加しており、情報リテラシーに関するプログラムも受けている。

打合せ会議も随時行っており、チームごとに実施するものの他、部門を跨いだ館内全体の会議も行っている。

また、Professional LibrarianとLibrary Assistantがペアになって業務を行うことで、Professional Librarianの経験をLibrary Assistantとシェアするよう努めている。

所感

サービスが全般的に院生向けであることや、オーダーメイドワークショップの多さ、研究者に対しマンツーマンで研究コンサルテーションサービスを行っている点などから、国

際的にレベルの高い HKU の教育・研究を支えるという強い使命感を感じた。

また、説明時に使用された資料や、各種オンラインコンテンツは、Prezi のサービスや Adobe Captivate を利用して作成しているようだが、それぞれに完成度が高く、ライブラリアンのパソコンスキルの高さに驚かされた。

利用者への学修支援サービスとして、あれもこれもと手広く提供しているというよりは、図書館が掲げる Mission、つまり一貫した方針に基づいて高度なサービスを提供している印象があり、我々にも見習うべき点が多いと感じた。

参考サイト

- Learning Support to Teaching, Learning and Research
https://prezi.com/a2y-az29begz/library-support-to-teaching-learning-and-research/?utm_campaign=share&utm_medium=copy [accessed 2015.1.18]
- Training <http://www.lib.hku.hk/general/instruction/> [accessed 2015.1.11]
- Subject Guides <http://libguides.lib.hku.hk/home> [accessed 2015.1.11]

1.4. Digitization at HKUL

講師： Dr. Kam-ming Ku, Head, Technology Support Services
Ms. Eunice Chan

HKUにおけるデジタル化についての講義は、2013年度海外集合研修でもあり、そのときは2回に分けて計2時間半にわたり詳細な説明がなされたようである。その報告書がすでに公開されている¹⁴。一方、2014年度は講義時間が30分不足だったこともあり、pptを用いた簡単な説明を聞いたのみで、デジタル化の作業現場や産物を見学したわけではないことをお断りしておく。

HKU Librariesでは、所蔵している香港関係の貴重書、政府などの19世紀からの公文書、新聞記事などをデジタル化するプロジェクトを1995年から進行しており、すでに30ほどのデジタルコレクションがインターネットで公開されている¹⁵。最初に着手されたものは、HKUでの過去の試験問題のデジタル化で、ExamBaseという名のデータベースとして学内限定で公開されている。デジタル化のメリットとして、「香港の貴重な資料がいつでもどこからでもアクセスでき、同時に複数の人が閲覧可能であること」などを挙げた上で、資料保存という目的もあると説明された。デジタル化の対象としているのは、図書や文書などの印刷物だけでなく、写真、録音・録画された音声や動画にまで及んでいる。

印刷物のデジタル化に用いる機器は一般的なスキャナーだが、図書を開いてスキャンする際に古い製本の「のど」が破損しないように開いた状態でスキャンできるスキャナーを用いたり、デジタルカメラで撮影したりすることもある。また、所蔵しているマイクロフィルムもスライドスキャナーを利用して行っている。デジタル化したファイルは、インターネットで公開するものと保存用と2種類作成しており、印刷物の場合は、公開用はPDFで保存用はTIFF、写真の公開用はJPEGで保存用は同じくTIFFと、それぞれ異なるフォーマットに変換している。音声や動画も同様に公開用と保存用でフォーマットを変えている。デジタル化した資料には書誌事項などのメタデータを付けているが、全文検索ができるようにOCRで読み込むこともしている。

また、JULACの共同事業として実施している香港のテレビ番組のデジタル化について簡単に説明された。2005年にJULACの8大学が放送局側と交渉してこのようなプロジェクトが始動したそうである。8大学間で作業を手分けして、それぞれできあがったものを共有する仕組みで、HKUはTVBというローカル放送局が放映するドキュメンタリー（広東語番組）を録画している。現時点では8大学で共通のメディアサーバーを持っていないので、HKUが担当している分はメタデータの目録をつけてデジタルデータをHKUのサーバーにアップしておく、他の7大学がそれをダウンロードし、HKUも他の大学からダウンロードしている。各大学はそれぞれ自校のサーバーに蓄積して、自校プラットフォームで見られるようにしている。HKUでは図書館ホームページのeVideo

¹⁴ 2013年度訪問者による詳細な報告は、「2013年度私立大学図書館協会海外集合研修報告書」p.7-14を参照のこと http://www.jaspul.org/ind/asset/docs/shugo_report2013.pdf/ [accessed 2015.1.24]

¹⁵ The University of Hong Kong Libraries, “Digital Initiatives” <http://lib.hku.hk/database/> [accessed 2015.1.24] で公開されているコレクションの一覧（一部はHKU学内のみ公開）が表示され、そこからデジタル資料にアクセスできる。

(<http://evideo.lib.hku.hk/>) で公開している。どの番組を録画するかは、事前に番組編成表を TVB からもらって HKU から録画希望を出して TVB が承認する仕組みだが、TVB 側から録画の依頼が来ることもあるらしい。

日本では大学図書館がテレビ番組を録画してデジタルアーカイブを保持し、利用者が無料で視聴できる制度は全くないので、JULAC のこの取り組みは斬新である。

参考サイト

- The University of Hong Kong Libraries, “Digital Initiatives”
<http://lib.hku.hk/database/>
- HKUL AV & Reserve Collection “eVideo” <http://evideo.lib.hku.hk>

1.5. HKU Scholars Hub

講師： Mr. David Palmer, Head, Digital Strategies and Technical Services

前章のデジタル化についての講義と同様、このトピックも 2013 年度海外集合研修に引き続いて、同じ講師による講義だった¹⁶。やはり 30 分程度の短い講義だったので、用意された ppt を端折りながら、検索して表示される画面のデモンストレーションで HKU Scholars Hub（香港大學學術庫）を簡単に紹介していただいた。Palmer 氏はテクニカルサービス担当の Associate University Librarian（副館長）であり、この Scholars Hub のスタートからこの事業の責任者を務めておられる。雑談で知ったのだが、Palmer 氏は若い頃に大阪の企業で貿易事務に従事された経験があり、日本語がかなりできるそうである。その後全く関係のない図書館界に転身して、HKU で 20 年以上ライブラリアンとして勤務されている。

さて、Scholars Hub とは、一言で表現すると Institutional Repository（機関リポジトリ、IR）の発展形である。IR は現在日本の大学図書館界でも設置の動きが盛んで、主に紀要などに掲載された教員や研究者の論文、学位論文などのフルテキストを収録し、公開するシステムとして機能している。HKU では、2005 年に IR を設置して、当初はやはり論文のフルテキストなど出版物がメインだった。しかし、2009 年に HKU が大学のミッションとして”Knowledge Exchange”(Research, Teaching に次ぐ 3 番目のミッションだそうである)を打ち出したことで、IR から Current Research Information System(CRIS)として、さらに HKU の研究成果を「見える」ものに発展させることになった。現在、CRIS として、HKU に所属する研究者に関するあらゆる情報（出版物はもちろん、特許、作品、受賞歴、参加している研究プロジェクトや組織、学会や社会での活動歴、共同研究者、獲得した補助金や外部資金、メディアでの出演や発言、論文の被引用件数など）を網羅的に収録し、包括的に外に発信している。その取り組みはまだ現在進行形で、今後さらに関連情報が追加されていく可能性を孕んでいる。まさに HKU の研究活動の hub（中心・拠点）として、HKU でどのような研究が行われ、それが学界でどのように評価されたかということがこのシステムを検索することで得られる仕組みとなっている。もちろん研究だけでなく、教員としての情報（審査した学位論文など）も含めている。

IR が論文単位で収録・検索するシステムであるのに対し、Scholars Hub は研究者個人がメインのエントリーとなっている。そして各々の研究者が所属する学部や研究科が研究者の集合体として組織のエントリーもされている。研究者個人と組織それぞれの Reputation, Identity, そして Impact が、HKU 全体の Institutional Assets（大学の知的資産という意味で理解した）となると説明された。それを確認できるのが、この Scholars Hub である。

研究者個人のエントリーが重要であるので、研究者を特定する条件をシステムに持たせているのが特徴である。中国系香港人の研究者は、その氏名が出版物やデータベースにおいて、アルファベットのフルネーム表記やイニシャル表記、ミドルネームつき、中国語繁体、中国語簡体などさまざまな形で表記されるが、同一人物だとわかるように Scholars

¹⁶ 「2013 年度私立大学図書館協会海外集合研修報告書」 p.5-6 を参照のこと
http://www.jaspul.org/ind/asset/docs/shugo_report2013.pdf/ [accessed 2015.1.24]

Hub では注意を払っているそうである。また、その研究者が Scopus データベースや Google Scholar Citations など ID や Profile を付与されていればその情報も掲載している。研究者の論文レベルでは、その論文の書誌事項はもちろんのこと、Scopus や Web of Science、PubMed などのデータベースでの被引用件数も紹介しており、このような”Bibliometrics”を重視した点は、確かに IR のはるか先に進んだシステムであると感じた。

これだけ多彩な情報を誰が探して、入力しているのかについては、やはり Palmer 氏をリーダーとする図書館のスタッフが行っているそうである。HKU は世界的な大学ランキングの常連校であり、それだけの研究成果を上げているのは当然だが、その成果を積極的に発信しようとする大学の方針を受けて、図書館が非常に努力していることに感心した。

参考サイト

The HKU Scholars Hub (香港大學學術庫) <http://hub.hku.hk/>

2. The Hong Kong Polytechnic University, PolyU (香港理工大学)

① 大学概要

香港理工大学(以下 PolyU)は、1937年に Government Trade School として発足し、中等教育以降の技術機関として香港で初めて公的資金を受けて設立された学校である。その後変遷を経て、1994年に正式に大学として認可され、現在の The Hong Kong Polytechnic University となった。

現在は8学部(Applied Science and Textiles, Business, Construction and Environment, Engineering, Health and Social Sciences, Humanities, Design, Hotel and Tourism Management)を有し、32,000名の学生が通う香港で最も学生数の多い大学である。

教育水準は非常に高く、US ニュース&ワールドレポートの2015年度世界大学ランキングによると、科学技術分野で世界第9位、香港第1位にランクインしている。

立地面では、有名なアベニューオブスターズがある最寄り駅から1駅で行ける紅磡(ホンナム)という駅の目の前に建っており、市街地にも近いため、非常に便利な好立地である。

② 図書館概要

PolyUの図書館は PAO YUE KONG Library という名称である。図書館としてはこの1つだけで、各学部・研究科などの分館はない。設立は1972年で面積は16,662㎡である。蔵書数は2,778,868冊、電子ブックは532,477タイトル、電子ジャーナルは50,332タイトルで、416のデータベースを契約している(2014年12月調べ)。

閲覧席は3,871席と、香港の大学図書館の中では座席数が多い。

開館時間は月～土曜日までは午前8時30分～午後11時、日曜日は正午～午後10時(試験期は平日と同様)で、24時間開いている24-Hour Study Centreも用意している。

また、ライブラリアンのうち22%が Professional Librarian である。Professional Librarian は図書館学の修士号を持っていることが条件となっており、かつては香港国内で図書館学の修士号を取れる大学がなかったため、海外で取得したライブラリアンが多い。

なお、来館者数は1年間で290万人にもものぼる。JULACを構成する8大学間では、互いの図書館の直接利用が可能だが、当図書館が他大学からの来館者数のトップを占めている。したがってとても忙しいとのことである。他大学に比べて立地が便利であることが理由の1つであろう。

<施設見学>

当図書館は6階建てである。地上階はグランドフロア(GF)と呼ばれ、GF、1F、PF、2F、3F、4F、5Fという構成である。エントランスはGFから数えて3階にあたるPF(Podium Floor)に位置している。当報告書では、PF、GF、3Fについて紹介したい。

➤ PF

カウンター以外のほぼ360度がガラス張りになっており、陽の光が差し込み、非常に明るく開放的なフロアである。貸出カウンターはこの階にある。

・ エントランス

我々の訪問時には実施されていなかったが、試験期になると“Wall of Wishes”と呼ばれる大きなメッセージボードが設置される。“Wall of Wishes”には来館者が自由にメッセージを書いた紙を貼り付けることができる。試験に関する願い事を書いたり、卒業を控えた学生は別れの言葉などを書いたりしている。学生から大変好評なようで、利用者同士のコミュニケーションを促進する良い取組みとなっている。



画像出所 訪問時に見せていただいた PPT

・ Current Awareness Centre

フロアの中心に円形に書架が設置されており、新着図書や新聞、ポピュラーな雑誌、“PolyU Reads “と呼ばれるベストセラーや賞をとった本など、楽しく読める、読み物的な要素のある図書を中心に配架している。このように読書習慣の促進にも力を入れていることが PAO YUE KONG Library の特徴だと言える。



円形の書架



新着図書の展示

画像出所 左：PAO YUE KONG Library Floor Plan
<https://www.lib.polyu.edu.hk/about-us/floor-plan>
右：筆者撮影

・ Reserve Books

学部の指定図書や、教員による授業での推薦図書が配架されている。通常の図書と比べて貸出期間が短く設定されており、学部生を例にとると、6 時間、1 晩、7 日間の 3 種類の設定がある。

なお、当図書館には自動貸出機が1台のみしかなく、その1台は Reserve Booksゾーンに設置されていた。



ガラスの壁で区切られている

画像出所 PAO YUE KONG Library Floor Plan
<https://www.lib.polyu.edu.hk/about-us/floor-plan>

・ Collaborative Study Area

Current Awareness Centre を中心にその外側に様々な形の机や椅子が配置されていた。その中でも窓際の一角が Collaborative Study Area と呼ばれており、光が多く差し込む気持ちの良い空間であった。Wi-Fi 完備であるため、多くの利用者がパソコンを利用し勉強していた。



画像出所 筆者撮影

・ Multipurpose Hall

静かなディスカッションが許されている多目的ルームである。そのため音が漏れないようフロアからは扉で区切られているが、ガラス張りであるため、外からも中にいる利用者の活動を見ることができる。フレキシブルに動かしたり組み合わせたりできる机・椅子を配置し、自由なディスカッションを促している。なお、この部屋でのみ蓋付飲み物の利用が許されている。



画像出所 左：筆者撮影
右：PAO YUE KONG Library Group Discussion Areas
<https://www.lib.polyu.edu.hk/facilities/group-discussion-areas>

・ LibCafe@PolyU

図書館内に設置されたカフェで、館外からも入店できるようになっている。ここで購入した飲み物は、図書館内に持ち出すことは不可である。利用者の休憩スペースとして活用されており、我々が訪問した際も利用者で賑わっていた。



図書館内の Café エントランス



Café 内

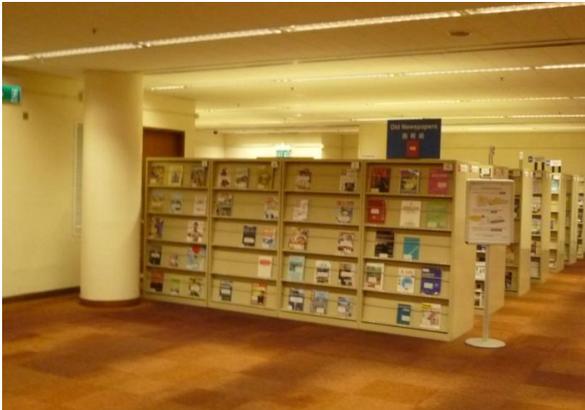
画像出所 左右：PAO YUE KONG Library LibCafe@PolyU
<https://www.lib.polyu.edu.hk/facilities/libcafe>

➤ GF

カレント雑誌コーナー、Discussion Zone、Quiet Study Room、24-Hour Study Centre の4つのゾーンに分かれている。自由にディスカッションができる部屋、静かに自習をする部屋など、様々なスタイルで学習できる部屋が集まるフロアで、印刷室も2つ設置されている。

・カレント雑誌コーナー

スペースのほとんどが閲覧席となっており、冊子体のカレント雑誌用の書架は下の写真（左）に写っているものですべてだそうだ。その書架の少なさに我々は驚いた。



カレント雑誌書架



閲覧席

画像出所 左右：筆者撮影

・ Discussion Zone

以前は製本雑誌の配架場所だったが、利用者のニーズに対応し、製本雑誌を移動して、現在は Discussion Zone として活用している。机や椅子を自由に動かしてディスカッションして良い。壁面には参考図書コレクションが配架されていた。

なお、伺った話によると、PolyU では電子ジャーナルの普及に伴い、雑誌の製本は既にあまり行っていないそうだ。かつ、製本雑誌は学外に設置している書庫にて保管している。



画像出所 筆者撮影

・ Quiet Study Room

静かに学習するための部屋で、扉で仕切られていた。



画像出所 筆者撮影

・ 24-Hour Study Centre

24時間開いているスタディルームである。可動式の机・椅子があり、部屋の中心には複数のパソコンも設置されている。グループで使用できるグループディスカッションルームも11部屋用意されている。現在、このエリアを拡張するために改装中とのことで、あらゆる所にビニールシートやテープが貼られていた。

図書館は午後11時に閉館するので、館内にいる利用者は一度全員外に出なければならないが、その後24-Hour Study Centreに直通の入口から入館し直すことで、午後11時以降も利用することができる。なお、午後11時以降は警備員のみが滞在し、ライブラリアンはいないようだ。セキュリティ強化のため、24-Hour Study Centreにはいくつかの監視カメラが設置されていた。



画像出所 左右：筆者撮影

➤ 3階

Multi Media Commons と Research Enhancement Centre の2つのゾーンに分かれているが、Multi Media Commons は現在リニューアルオープンに向けての改装中であったため、Research Enhancement Centre のみ見学できた。

・ Research Enhancement Centre

ITを中心とした研究支援ラウンジである。研究に必要なデータベースやソフトウェアを備えたパソコンが設置してあり、予約の上で利用することができる。

教員や院生が優先的に使用できる個室タイプのリサーチキャレルも85個用意されており、オンラインで予約をすることが可能である。利用時はICカードを個室の入口に設置されたカードリーダーに通すことで入室可能であり、予約している時間から20分間経過しても予約者が来ない場合はキャンセル扱いとなる。リサーチキャレルの利用可能時間は、時間帯により様々で、詳細なルールがホームページ上で指示されている¹⁷。



画像出所 左右：筆者撮影

4階や5階にもリサーチキャレルが設置してあるが、オンラインで予約できるのは3階にあるこちらのキャレルだけである。4階や5階のキャレルについては、カウンターで利用申込みが必要だが、1日中借りられるため、朝から利用希望者が並ぶそうだ。

また、オンライン予約に対応しているリサーチキャレルとパソコンについては、2014年12月より、空き状況がリアルタイムで当図書館ホームページのトップページに表示されるようになった。そこから直接オンライン予約できるため非常に便利な印象を受けた。

③ 蔵書構築・予算

当図書館での最近の蔵書構築と予算配分の傾向について話を伺った。

・ e-preferred

香港で訪問したすべての大学で同様であったが、PolyUでも“e-preferred”として、電子資料を優先的に購入している。その理由として、場所の制約がないこと、複数人による同時アクセスが可能なこと、修繕の必要がないこと、ウィーディング（不要となった資料の除架）の手間がないこと、写真・音声・動画などあらゆるメディアでコンテンツを利用で

¹⁷ 1回の利用時間は、セッションの時間ベースに規定されている。

<https://www.lib.polyu.edu.hk/services/it-support/ibooking/carrels-rec#session>

きる可能性が広がっていることなどを挙げておられた。

冊子体資料と電子資料の受け入れ数を比べると、2009年の時点では冊子が84%、電子が16%という内訳であったのに対し、2013年は冊子が40%、電子が60%となっており、近年は電子資料の購入数が逆転し上回っている。予算配分についても、冊子は20%、電子は80%とのことで、冊子体資料の購入は年々減らしている。

“e-preferred”の名の通り、同一資料が冊子体・電子共に存在する場合は、基本的に電子資料を優先的に購入するが、万一教員などから特別な要望があった場合には、冊子体資料の方を購入することもある。

・ DDA

DDAとはDemand Driven Acquisitionの略で、電子資料を利用実績(利用者からの需要)に基づいて購入するシステムのことを言い、PDA(Patron Driven Acquisition)とも呼ばれている。今回訪問したどの大学でもこのシステムを採用しており、香港ではメジャーなシステムだと言える。

PolyUでは、Wiley, Elsevier, YBP-ebrary, JSTOR, Alexander Street Pressの5社と契約をしている。各提供元によって購入システムには違いがあるようだが、今回はWileyのシステムについて話を伺った。

まず、WileyとDDAの契約をし、Wileyが提供している電子タイトルを当図書館の利用者が1年間利用できるようにする。利用可能なタイトル数は10,000タイトルあるそうだ。利用者は自由にタイトルを閲覧したり、ダウンロードすることができる。そして1年間のあいだに2回、Wileyから利用レポートが送られてくる。各タイトルの利用率を見て、それを参考にライブラリアンが購入タイトルを決める。

利用率だけから購入タイトルを判断すると、アンバランスなコレクション構築となってしまう懸念がある。そうならないよう、最終的にライブラリアンが購入タイトルを検討し、調整をすることが大事だと考えておられた。

④ 学修支援・利用教育

図書館による学修支援・利用教育として様々な取組みがなされているが、その中でも特に印象に残った3つについて紹介したい。なお、当図書館では学部生への学修支援に力を入れている印象を受けた。

・ 情報リテラシープログラム

主に学部生向けに、オンラインで情報リテラシープログラムを提供している。オープンアクセスであるため、世界中から視聴することができる。

プログラムは、“Selecting information sources(情報源の選択)”, “Searching for information(情報検索)”, “Evaluating information(情報の評価)”, “Managing information(情報の管理)”の4つのモジュールから構成されており、各モジュールは20~30分で学べるようになっている。それぞれにゲームや動画が取り入れられ、楽しみながら学べる工夫がされている。最終的には問題に答えてそれを提出することでモジュールを終える。その正解率が75%以上であれば、修了資格を図書館から授与される。

図書館で提供しているガイダンスを受けた後に、この情報リテラシープログラムの視聴

を復習課題として課すなどして利用を促進している。また、当プログラムの修了を必要とする授業もあるなど、正課科目との連携も行っている。

なお、この情報リテラシープログラムの他にも多数のオンラインチュートリアルを提供しているが、それらはすべてライブラリアンが自前で作成している。

他にも、情報リテラシーをライブラリアン自身が学ぶため、外部講師を招いた研修も行っている。また 2013 年からは the Project SAILS (Standardized Assessment of Information Literacy Skills) International Cohort Assessment Beta Test¹⁸に参加しており、学生の情報リテラシースキルを調査するとともに、その結果を情報リテラシー教育の向上にも役立てていきたいと考えておられた。

・ガイドの充実

利用者の研究をサポートするための様々なガイドをホームページ上で提供している。その中に“Subject Research Guides”と呼ばれるものがあり、学部や分野ごとにページを設け、Faculty Librarian の紹介、その分野で役立つレファレンスブックや、図書、電子ジャーナル、データベース、インターネットリソースの紹介、学内で用意しているビデオチュートリアル、OPAC 検索窓などを掲載している。とても手の込んだページであり、自分の専攻分野のページへ行けば、リサーチに役立つツールや情報が豊富に入手できるようになっている。これらはすべて Faculty Librarian が作成している。

特に興味深かったのは、そのページが役立ったかどうかを利用者がフィードバックできるボタンが設けられていることだ。ほぼすべてのガイドのページにフィードバックボタンが設けられている。

・教学との連携

図書館主催のワークショップの受講歴が、CAT と呼ばれる Student Affairs Office 発行の成績証明書に記載されるようになっている。

具体的には、1 年間に 3 つのワークショップを受講する必要があり、かつ学部生は 3 つのうち 2 つはコアワークショップと呼ばれる、大学での勉強のために必要な情報リテラシーを習得するための基礎的なレベルかつ必要不可欠な内容のものを受講することが条件となっている。例えば、“Surfing the Internet for Useful Information”や“Searching Electronic Newspaper Databases”などがコアワークショップとして開催されている。コアワークショップの他にはリサーチシリーズワークショップがあり、こちらはもう少し発展的なスキルを学びたい学生向けに開かれている。例えば“Web of Science Citation Databases”などがある。

また、教員や学生からの要望（特定の分野、授業の課題）に応じたオーダーメイドプログラムも積極的に実施している。5 日前までに希望を連絡すれば、Faculty Librarian が詳細な打ち合わせの上で、カスタマイズワークショップを行ってくれる。

なお、伺った話によると、年間約 200 以上（新入生向けのガイダンスを含めると 300 以上）のワークショップを 8 名の Faculty Librarian で運営しているそうだ。利用教育の説明を担当された Faculty Librarian である Tsang 氏に大変ではないかと尋ねてみたところ、

¹⁸ Project SAILS とは、大学向けの情報リテラシーに関するテストである。

大変な時期もあるけれど大丈夫だとのことであった。

ライブラリアンの学修支援に対する意識の高さを感じるとともに、教員や教学組織と図書館が協力しあい、情報リテラシー教育を中心とした学修支援を積極的に行っていることがわかった。

⑤ 読書習慣支援

当図書館では、学術書の他に、読み物的な本を中心とした読書習慣の形成支援にも力をいれている。その取組みの一例を紹介する。

・ READ@PolyU

2011年より始まった読書習慣促進のためのプログラムで、学部新生を対象に実施している。共通の本を読むことで、新しい環境において仲間と共通の経験をシェアし、コミュニティ形成の感覚を育むとともに、大学でのアカデミックな生活を意識させるものとして位置付けている。図書館と English Language Centre が主体となって実施しているが、READ@PolyU の実行委員会には様々な部署の教員やスタッフが参加している。さらに企業からの寄付も受けており、まさに全学的な協力体制のもと力を入れて実施されているプログラムだと言えるだろう。

プログラムの概要としては、毎年新学期に1冊の本が指定される。指定図書はライブラリアンが決めているが、その方法は前年度に全学生にメールで推薦図書を募り、その中から200ページ前後でかつ内容が難しすぎない、ポピュラーな本を選定するというものだ。今年では *The Boy in the Striped Pyjamas* というユダヤ人迫害をテーマにした小説が選ばれた。そしてテーマとなる指定図書に関連する様々なイベントが1年間を通して実施される。具体的には「本の内容紹介」「ディスカッションセッション」「テーマに関する展示」「テーマに関するセミナー」「テーマに関する映画上映」「著者とのトークセッション」「ライティングに関するワークショップ」が順を追って開催され、最終的には「エッセイコンテスト」が実施される。エッセイは500wordsほどのもので、評価基準も明示されている。ファシリテーターとして教員や副学長が参加しており、コンテストの優勝者には iPad が贈られる。2011年からのプログラムなのでまだ歴史は浅いが、現在は約80%の新生が参加する人気プログラムとなっている。

・ Kindle の貸出

読書習慣のサポートと促進のために、Kindle に様々な e-book を入れて貸出をしている。10種類の主題テーマに分けて Amazon からタイトルを購入しており、主題ごとに2台、計20台の Kindle を用意している。現在192タイトルを用意しているが、娯楽用など親しみやすい内容のものが中心となっている。10種類の 카테고리としては、“Health & Fitness & Dieting”や“Travel Books”などがある。購入タイトルは蔵書構築チームで相談して決めている。図書と同様に、OPAC でタイトルが検索でき、かつ Kindle の空き状況も確認できる。Kindle は7日間借りることができ、とても人気がある。

現在は白黒対応のものしかないが、デザインや建築の資料閲覧のために、近々カラー対応 Kindle を購入し充実を図っていく予定である。

⑥ 所感

当図書館では、環境面、人材面それぞれにおいて積極的に学修支援を行おうとする姿勢を感じた。

まず環境面としては、PolyUにはラーニング・コモンズと呼ばれる空間はなかったが、図書館全体として、書架を減らして学習スペースを広げようという方向性があった。したがって、ある意味館内全体がラーニング・コモンズのようにあり、資料と学習スペースの融合が効果的に図られていると言える。また、様々な利用条件の異なる部屋の設置や、休憩所としてのカフェが併設され、環境面から多様な学習形態のニーズに応えている。

次に人材面としては、利用者アンケートや学生からの意見聴取を積極的に行っている。最近では、WhatsAppというチャット形式で図書館利用に関する質問や一般的な資料検索に関する相談を受け付けるシステムも導入した。このように、利用者のニーズをつかんでそれに応えようとする積極的な姿勢を感じた。そしてこれら人材面でのサポートの実現には、Faculty Librarianの存在が大きいと言える。

日本ではFaculty Librarianが存在しないため、香港と全く同じようにはいかないだろうが、図書館員の担当を学部ごとに割り振ることや、各学問分野の知識を深めていくといった取組みは可能であると考えられる。知識をつけると共に、教員や教学分野との連携を積極的に模索する姿勢をもつことで、日本でも今以上に充実した学修支援が実現していけるのではないだろうか。

参考サイト

- About PolyU Facts&Figures
http://www.polyu.edu.hk/web/en/about_polyu/facts_figures_development/facts_figures/index.html [accessed 2015.1.2]
- PAO YUE KONG Library Facilities
<https://www.lib.polyu.edu.hk/facilities> [accessed 2015.1.2]
- PAO YUE KONG Library Research Help
<https://www.lib.polyu.edu.hk/research-support/help>[accessed 2014.12.26]
- PAO YUE KONG Library READ@PolyU
<http://www.lib.polyu.edu.hk/read/>[accessed 2014.12.26]

3. Hong Kong City University, CityU (香港城市大学)

香港城市大学¹⁹ (以下 CityU) には研修 3 日目に訪問し、図書館見学のほか University Librarian (図書館長) の Prof. Hsianghoo Steve Ching 氏から図書館全体に関するお話を、担当のライブラリアンから Collection Development や学修支援 (利用教育) について説明を受け、質疑応答を行った。

① 大学概要

創立は 1984 年のため、訪問した 2014 年は 30 周年記念の年であった。Business, Liberal Arts & Social Sciences, Science & Engineering の 3 つの College で約 2 万人の学部生、大学院生などの約 9 割を占める。他に Creative Media, Energy & Environment, Law の 3 つの School がある。2014/15 年の外国人学生数は約 5,100 名で、うち約 4,000 名が中国大陸の学生である²⁰。



外観。30 周年記念を祝う青と黄色のバルーンが見える

② 図書館概要

多額の寄付を行った Sir Run Run Shaw の榮譽を称えて Run Run Shaw Library の名称がつけられている。蔵書数は図書約 125 万冊 (製本雑誌含む)、カレント雑誌約 1,900 タイトル、電子ブック約 252 万点、電子ジャーナル約 6 万 9,900 タイトル、データベース約 340、オンラインの AV 資料約 10 万 6,500 点である (2014 年 6 月末時点)²¹。

¹⁹ 2013 年度訪問者による CityU の詳細な報告は、「2013 年度私立大学図書館協会海外集合研修報告書」p. 36-41 を参照のこと http://www.jaspul.org/ind/asset/docs/shugo_report2013.pdf/ [accessed 2015.2.10]

²⁰ CityU, “Facts and Figures 2014/15” <http://www.cityu.edu.hk/fnf/student.htm> [accessed 2015.2.10]

²¹ CityU, “Library at a Glance” http://www.cityu.edu.hk/lib/about/lib_glance.pdf



図書館が入っている建物の外観。駅に直結する商業施設の通路を抜けた先にある



ガラス張りのエントランス



エントランス



エントランス近くの展示（大学創立 30 周年記念）

Semi-closed Collection (=写真左下。準閉架コレクション) のエリアには High-demand (要望度の高い) 資料が並ぶ。貸出の回転を速くするため、5 時間や 24 時間という時間単位の非常に短い貸出期間が設定されている。資料は利用率や教員の推薦などによって選定され、貸出期間によって色分けしたシールを本の背に貼っている。



Semi-closed Collection



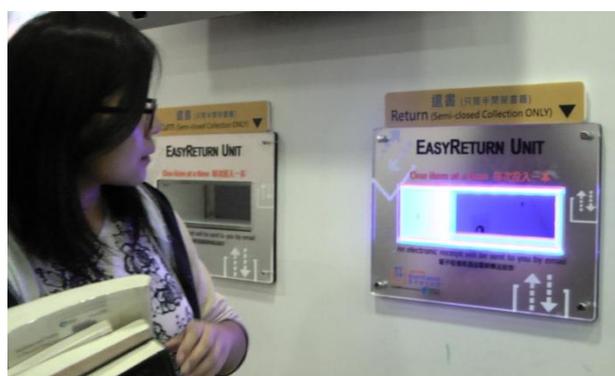
EasyPay System

延滞した場合には罰金を課しており、5時間貸しの資料は、1時間につき2香港ドル（＝約30円²²）で13時間を超えると4香港ドルに上がる。24時間貸しの場合は、1日目の延滞には24香港ドル（約380円）、2日目で48香港ドル（約760円）を課している。この延滞料金は、前頁右下の写真のEasyPay Systemで利用者が自身で清算できるようにしている。

またSemi-closed Collection内には、通常の自動貸出機ではなく一度に5冊をスキャンして貸出処理ができる特別な自動貸出機が設置されている（＝写真左下）。館内にこの1台しかなく、上海の大学と共同開発して特許を取得しているものだそうである。



特許を取得した自動貸出機。
5冊同時にスキャン可能



自動返却機。口に資料を入れると、
返却処理を行い発光する

この自動貸出機の横にはEasyReturn Unit（＝写真右上。自動返却機）があり、ポストの口に資料を通す際に返却処理がなされる。この返却資料は、6時間以内に書架に戻される。

職員は102名、うちProfessional Librarianは約20名である。CityUの図書館において特徴的であるのは他部署への異動はないものの、ライブラリアンが異なる職務内容を経験することが奨励されている点である。例えば、利用教育について説明していただいたReference Sectionの方は以前は目録を、収書関連の話をしていただいたCollection/Consortium Planning & Developmentの方はレファレンスを担当されていたという。これは香港においては珍しい仕組みのようで、香港の他の大学ではそれぞれの専門性を重視して横のつながりは打合せ会議などを通じて連携を図るのに対し、CityUの場合は異なる業務に携わる希望があればその機会を与えることを惜しまないという考え方であった。

③ ラーニング・コモンズ概要

香港でいち早くラーニング・コモンズを作っており、ほぼワンフロアにコモンズも含め

²² 三菱東京UFJ銀行2014年12月月間平均TTSレート15.83円/HKDを用いて算出。以下、香港ドルを円貨に換算している場合も同様の算出方法。

http://www.murc-kawasesouba.jp/fx/past_3month.php [accessed 2015.1.30]

た図書館の機能が集約されている点や、独特のデザインである下記ミニシアターや橋が特徴的である。



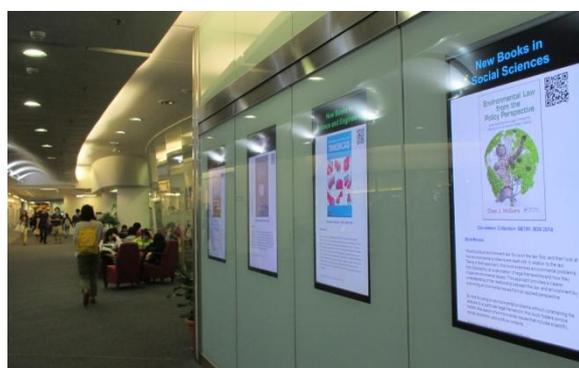
ミニシアター
卵型のデザインは生命の誕生を表わし、
図書館が学生にとって発見のスタート
の場であることを象徴する



ラーニング・コモンズの入口
橋のデザインは、過去と未来、西洋
と東洋など、図書館が様々なものを
「繋ぐ」存在であることを象徴する

その他にディスカッションなどグループワークのための部屋や、**The Oval** というその名のとおり楕円形のスペースがある。**Oval** の中心にはパソコン備え付きの閲覧席が配置された学習スペースがある。この **Oval** や、**Information Space** というコーナーのパソコンなどから、利用者は授業関連の学習資料を A4 サイズの白黒印刷であれば、年間約 1,400 枚まで無料で出力することができる。これは **Computing Services Centre** が管理する印刷サービスによるもので、ほとんどの学生が使い切れないぐらいだという。

また、**Oval** の閲覧席は、周囲を参考図書の書架が楕円形に囲んでいる。この席は 1 時間単位で最大 4 時間まで、年間では学生 1 人につき 300 時間まで予約可能である（コース/プロジェクトの指導教員の承認があれば 300 時間を超えることもできる）。



図書館のイベントや資料紹介に活用されているデジタル・サイネージ

④ 蔵書構築や選書など（選書ルール、電子/冊子の割合など）

図書館ホームページには **Library Collection Development Policy** として収書方針が掲げられている²³。選書基準については、例えば資料本文の言語の種類は最優先事項ではないものの、中国語と英語が優先されるといったことや、可能であればハードカバーよりもペーパーバックを入手するという記載がある。

また高額資料については図書館長が定める基準では、例えば **Scientific & Technical Books** なら 250 米ドル（＝約 3 万円²⁴）以上、それ以外の分野の図書は 200 米ドル以上と定義している。高額資料の購入を希望する場合には、所属学部の **Head** または **Chair Professor** の承認を得る必要がある。

前述の収書方針の選書基準には、同一資料に対して冊子体と電子媒体の選択肢がある場合、電子を選択することも記載されている。例外的に冊子を選択する場合の条件としては、例えば冊子体が **more convenient**（より便利）である場合や、当該タイトルの冊子体の **popularity and preference**（利用頻度や要望度）による、などの但し書きが添えられている。

逐次刊行物費とデータベースなどの電子資料費を合わせたものは予算の約 8 割を占め、AV 資料を含む図書費は残りの 2 割である。ここ数年の電子資料費と冊子資料費の割合も、およそ 8:2 である。また予算の約 33% を **Consortia// (1.2 JULAC Collaboration** で説明) の資料購入に充てている。2013/14 年は図書費予算の削減に伴い、利用の低い電子ジャーナルやデータベース約 740 点を中止したという。

⑤ 学修支援（ガイダンス、e-learning コンテンツ）

来館して受講する **face-to-face** 形式のガイダンスとして、オリエンテーションや **Information Skills Workshop** を開催している。新入生向けのオリエンテーションは、予約制で年度始めに 10 数回程度開催するが、強制ではないため参加率は低いという。英語だけでなく、広東語によるガイダンスを用意していたこともあったが、参加者数は伸びなかったため現在は英語によるもののみにしたとのことである。一方、大学院生向けのオリエンテーションは人気があり、満員となることが多い。外国人学生が多く、図書館の使い方や資料の探し方を知りたいという要望が強いことも一因ではないかという。**Information Skills Workshop** では、数種類の基礎的な **Core Course** を 2~4 回程度(1回 60 分~90 分)、年度始めの 9~12 月に開催している。これらのガイダンスはすべて任意参加で、正課授業ではないため 1 回に 25 人~30 人来ればよい方であるということであった。

ガイダンスの広報は、リーフレットの配布や学生寮へのポスター掲示、メールなどで行っている。しかし、メールにより日々大量の大学情報が発信されているため、学生に読んでもらうことを考え、比較的送信数の少ない土曜か日曜に送るようにしている。メールを

²³ Run Run Shaw Library, “Library Collection Development Policy”

http://www.cityu.edu.hk/lib/about/collpolicy/coll_policy.htm [accessed 2015.1.30]

²⁴ 三菱東京 UFJ 銀行 2014 年 12 月月間平均 TTS レート 120.41 円/USD を用いて算出。

http://www.murc-kawasesouba.jp/fx/past_3month.php [accessed 2015.1.30]

見てガイダンスに参加したという学生もいるため、ある程度効果はあるのではないかと
いうことである。

Online tutorial (e-learning コンテンツ) で提供するガイドについては、作成から数年が
経過しているためなるべく更新していくようにしている。学生の集中力が続くよう、更新
や新規作成するときには、できる限りコンテンツの長さを3~4分程度に抑えるよう工夫す
るそうである。ちなみにガイダンス受講者にアンケートを実施したところ、半数は対面型
を、半数はオンライン形式を希望する結果となった。2つのタイプの利用者の要望に応える
ため、どちらか一方だけでなく両方の選択肢を残すようにしている。

またデータベースの使い方を教える、業者によるガイダンスも行われる。特にデータベ
ース SciFinder については、使い方が難しいため例年、学期始めにガイダンスの実施を要
請している。

⑥ 所感

CityU は、訪問した他3大学と比較して異色な点を最も多く感じた図書館であった。ラ
イブラリアンの業務担当の変更が可能であることは先に触れたが、他にも採用の際には図
書館情報学などの修士号や博士号はもちろん、大学卒業の資格も求めないそうである。



静かに個人学習をするためのスペース

またラーニング・コモンズと言えど可動式の机
と椅子が定番だが、個人学習用のスペースではあ
るものの写真のとおり、伝統的な中国のデザイ
ンを採り入れた椅子を配置したエリアがあったのも
印象的である。

香港では大学図書館の館長は基本的に教員が兼
任するのではなく、ライブラリアンつまり図書館
員が務める。University Librarian (図書館長) の
Ching 氏はもともと台湾で教員として図書館長を
兼任されていたが、もっと図書館の仕事に関わりたいとの思いから転職された経歴の方で、
熱い思いをもってユニークな取組みに挑戦されている。

特に Ching 氏が重視しているとされていたのは古典の価値を若い世代にどのように伝える
かということである。現代の技術は過去のアイデアと繋がっているのだから、もっと古
典を学んでおいてもらいたいとの考えである。また自館だからこそできることとは何かを
考えた時にも、デジタル化は、今やどこも取り組み始めている中で例えば韓国の大学図書
館が所蔵する中国の古典をデジタル化する際に、単にデジタル化するだけでなく、その価
値や内容の一つ一つまでを調査する過程で CityU 図書館は協力していくことが可能であり、
そういった協同作業をもっと推進していきたいということである。このように古典に重き
を置かれている Ching 氏の計らいで、訪問時に用意していただいていた習字セットで李白
の詩を書き写す体験をさせていただいた。

4. The Hong Kong University of Science and Technology, HKUST (香港科技大学)

香港科技大学(以下 HKUST)にも 2013 年度海外集合研修の参加者が 2013 年 11 月に訪問して、図書館長ほか 2 名のスタッフから図書館の概要、ラーニング・コモンズ、および資料のデジタル化について約 2 時間半説明を受けている²⁵。

2014 年度海外集合研修では昼食を挟んで 5 時間滞在して、図書館見学のほかに Collection Development (蔵書構築) と利用教育について担当の方々から説明を受け、質疑応答を行った。

① 大学概要

1991 年創立で歴史の浅い大学ではあるが、研究大学として世界的な大学ランキングに常にランクインするなど高い評価を受けている。2014 年 9 月時点での学生数は 13,456 名(学部生 8,981 名、大学院生 4,475 名)で、内訳は香港出身者が約 72%、残り 28%が中国本土と海外からの留学生である²⁶。

HKUST には、Science, Engineering, Business & Management, Humanities & Social Science の 4 つの School と Interdisciplinary Programs があるが、最初の 3 つの School に大多数の学生と教職員が所属している²⁷。理工系と経営学で高い評価を受けるようになった要因のひとつが教員のレベルの高さにあり、全教員が博士号を所持していて、しかもその 80%が英米の超有名大学からと図書館で説明を受けた。大学での研究・教育はほぼ英語で行われている。

② 図書館概要

HKUST は学内に Lee Shau Kee Library (李兆基図書館) という図書館を 1 つだけ持ち、学内に所蔵するすべての資料を集中させている。2014 年夏時点での図書館の規模を数字で表すと、総床面積は 12,350 km²、座席数は 3,100 席、グループ学習室やスタジオなどが全館で 62 室、蔵書数 719,878 冊、電子ブックタイトル数は 270,351 である。2013/14 年の来館者数は延べ 2,142,250 人、貸出冊数は 178,730 冊、電子ジャーナルからの論文ダウンロード件数は 1,623,570 件となっている²⁸。

図書館へは、大学正面玄関にあたるロータリーに面した The Hong Kong Jockey Club

²⁵ 2013 年度訪問者による HKUST の詳細な報告は、「2013 年度私立大学図書館協会海外集合研修報告書」p.29-36 を参照のこと http://www.jaspul.org/ind/asset/docs/shugo_report2013.pdf/ [accessed 2014.12.23]

²⁶ HKUST-Hong Kong University of Science and Technology, “HKUST at a Glance” <http://www.ust.hk/about-hkust/hkust-at-a-glance/> [accessed 2014.12.23]

²⁷ HKUST, “Facts and Figures” <http://www.ust.hk/about-hkust/hkust-at-a-glance/facts-figures/> [accessed 2014.12.23]

²⁸ The Hong Kong University of Science and Technology Library, “Services and Information, Library Statistics” <http://library.ust.hk/info/statistics/> [accessed 2014.12.23] 来館者数の数字は、見学時にいただいたチラシ“HKUST Library in Figures 2013-14”から。

Atrium というコの字型の大きな建物の左側から入館する構造になっている。大学全体が香港九龍半島東部の Clear Water Bay 地域の海沿いの斜面に位置していることから、図書館のエントランスがある Ground Floor (G/F)は 5 階建の図書館の上から 2 層目にあたる。この階から最下層の Lower Ground Floor 4(L/G4)まで 4 フロア分（下へ L/G1、L/G3、L/G4 という階層になっている）の吹き抜けが東側にあり、吹き抜けのガラス張りの大きな窓から海がよく見える。また、最上階の 1st Floor を除いてどの階にもテラスか Library Garden と呼ばれている屋外のオープンスペースがあり、非常に快適な図書館である。



図書館の入口はアトリウムに面している



海を臨むLibrary Gardenで自習する人も。曲線のガラスは吹き抜けの窓で下層階へ続く。

HKUST 図書館に限らず、研修で訪問した 4 大学図書館どこにも共通していたことだが、図書館エントランスに続く広い空間ではほとんど書架を見かけなかった。代わりに、余裕を持たせて配置されたパソコンやソファがあり、カウンターでさえ入館ゲート近くの隅にかろうじて存在しているだけという印象を受けた。図書館内の一等地はどこも学生が自由に利用できるパソコンや自習席になっていて、電子資料が普及した現在では、図書や製本雑誌はアクセスが不便なエリアに設置された書架か、書庫に追いやられている。香港の大学では、図書館は物理的な図書や雑誌を利用する場所という機能がもはや主流ではないことを物語っている。

実際 HKUST 図書館では、香港の教育改革で 2012 年から大学が 3 年制から 4 年制になって学生が増加するにあたって、図書や雑誌をエントランスから遠い下層階に移動させて、座席やパソコンを増やした。その結果、全学生数の 20%の座席数と 60 以上のグループ学習室が実現し、まさに学生のラーニングスペースとしての図書館となっている。



広々とした図書館エントランス



エントランスの奥はInformation Commons

さて、この5フロアの図書館の中で、エントランスのある Ground Floor(G/F)の中央部はパソコンや3Dプリンタなどが設置された Information Commons となっていて、1階下の Lower Ground Floor 1(L/G1)の3分の2が Learning Commons である。これらの Commons だけでなく、館内は基本的に他人に迷惑にならない程度のボリュームなら会話を認めているが、Lower Ground Floor 3(L/G3)だけは個別のキャレルが多いことから、Quiet Floor として取り扱っていると見学時に説明を受けた。館内には多数のパソコンが設置されていて学生は自由に利用できるが、もちろん全館無線 LAN 対応なので、自分のノートパソコンを使っている学生の姿も多く見られた。また、館内に数多く設置されているさまざまな大きさのグループ学習室は、2時間単位での利用申請を経て利用できる。予約はオンラインで可能で、大学の ID/PW を入力して行う²⁹。

レファレンスサービスを提供している Information Desk は Information Commons 内にあるが、来館しなくても電子メールや WhatsApp というスマートフォン用のメッセージングアプリを利用してオンラインで質問をすることもできる。

HKUST 図書館のホームページでは、図書館や電子リソースの利用に関する情報やリンクはもちろん、多岐にわたる Research Guides などが提供されている。このホームページにある”Collection Highlights”は、図書館の Reference & Collection Services に所属している Professional Librarian たちが交替で作成しているものである。長期休暇中を除く毎月、担当になった人がテーマを決めて、そのテーマに関係した資料を蔵書から複数選んだ上、短い書評と請求記号をつけて、”BOOK COLLECTION”, ”E-BOOK COLLECTION”, ”MEDIA COLLECTION”の3カテゴリーに分けて紹介している³⁰。また、図書館のブログ

²⁹ HKUST Library, ”Rooms & PCs Available for Reservation”のページで、予約のルールや各種グループ学習室の施設などの情報を提供している。 <http://library.ust.hk/serv/booking/rsrv.html> [accessed 2014.12.23]

³⁰ HKUST Library, ”Collection Highlights” で過去のトピックを参照できる。 <http://library.ust.hk/res/highlights/archive.html> [accessed 2014.12.23]

でも、ニュースなどと共に”Readers Alert”を月 2 回程度掲載（同様の内容を全教職員と学生にメールでも送信）していて、そこでも雑誌記事や新刊本の紹介やコメントを載せている³¹。このように、図書館が利用促進のために積極的に情報発信をしていることがうかがえる。

③ ラーニング・コモンズ概要

先に述べたように、図書館の L/G1 の 3 分の 2 ほどのスペースは **Chevalier Learning Commons** というエリアである。2012 年 2 月にオープンしたこのラーニング・コモンズは週末も含めて 24 時間オープン（図書館自体は平日 8:00AM-11:00PM 開館で、土日の開館時間はもう少し短い）している。図書館内にありながら、ここだけ独立した開館時間で運用されていることから、図書館エントランスの 1 フロア下にラーニング・コモンズ専用のエントランスを持ち、同じフロアの残り 3 分の 1 とはガラスドアの開閉によって人の往来を遮断できる構造になっている。なお、図書館のエントランスゲートでは ID カードを携帯していない人でも入館できるが、ラーニング・コモンズ専用のエントランスゲートにはカードリーダーが設置されていて、図書館閉館後は HKUST の教職員や学生のような ID カード所持者のみ入館できる。また、ラーニング・コモンズにも **Information Desk** が設置されていることに加えて、600 以上の座席が設置されている。訪問時は試験が近づいていたこともあり、図書館閉館後の夜間でも 300 人ぐらい入館していると説明された。夜間はセキュリティガードが 2 名常駐している。

ラーニング・コモンズは、次の 4 つのエリアにゾーン分けされている。

➤ Study Zone

17 の **Group Study Rooms** と **Open Study Area** で構成されている。**Open Study Area** にはパソコンが設置された固定席だけでなく、移動可能な机や椅子が配置されているので、小グループでの共同学習もできる。

➤ E-Learning Zone

教室仕様の PC ルームが 2 部屋（それぞれ **Windows** と **Mac** を配置）あり、図書館企画のプログラムだけでなく、通常の授業や学内他部署主催のワークショップなどにも利用されている。これらの PC 教室は図書館のスタッフまたは教職員のみ予約可能だが、講習会や授業で利用されていない時間帯はオープン利用で学生が自由に使える。また、**Tutorial Space** と呼ばれるパーティションで区切られたエリアが 3 か所あり、そこでも、学部による学習サポートなどが定期的に行われている。

➤ Creative Media Zone

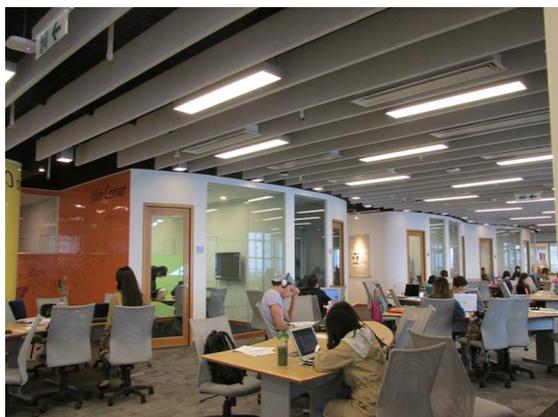
テレビスタジオのような **Media Production Studio** と 4 つの AV 編集室、そして簡易製

³¹ HKUST Library Blog <http://library.ust.hk/blog/> [accessed 2014.12.23]

本やポスター印刷などができる機器類を備えた **Graphic Workshop** で構成されたゾーンである。このゾーンは図書館ではなく、他部署の **Publishing Technology Center (PTC)**が運用していて、時間は限られているがサポートスタッフも常駐させている。

➤ **Refreshment Zone**

ラーニング・コモنزのエントランスからガラスで仕切られたこのゾーンだけは、館内全域で許可されている蓋付容器の飲み物だけでなく、軽いスナック程度の飲食も認めていて、自動販売機も設置されている。



Study Zoneの閲覧席とグループ学習室



ガラスで仕切られたRefreshment Zone

Learning Commons Manager の **Gabrielle Wong** 氏に、ラーニング・コモنزの利用促進の取り組みなどについて尋ねた。2012年にラーニング・コモنزがオープンした前後に数回、学内者向けの見学会を開催して、参加した教員や他部署のスタッフに「この施設は、〇〇のような授業やセミナーにぜひ使ってほしい」と具体的な用途を紹介してアピールしたそうである。そのような努力を繰り返したことで、単に学生の自主学習の場としてだけでなく、例えばキャリアセンターがセミナーや模擬面接の会場として用いたり、授業で利用されたり、教員がオフィスアワーの個別相談の場所としたり、などの図書館外との連携でも、ラーニング・コモنزが活用されている。学生にとっても、キャンパス内のわかりやすい場所にあることや、24時間開いている利便性はメリットだろうと **Wong** 氏はおっしゃっていた。

図書館ウェブサイト内のラーニング・コモنزのページには、2013年春に実施された学生アンケートやフォーカスグループ・インタビューなど3種類の評価の結果要約が公開されている。それによると、パソコンが足りないなどの不満や要求は寄せられているものの、全体として **HKUST** の学生たちに高い評価を得ていることがうかがえる³²。

³² Chevalier Learning Commons @HKUST Library, “The Learning Commons Assessment 2013.” <http://library.ust.hk/lc/assessment2013.html> [accessed 2014.12.23]

④ 蔵書構築や収書など

「本来は Collection Development & Services Manager が説明するべきだが、彼女が休暇で不在なので」という前置きがあって、Technical Services の Head である MingKan Wong 氏から HKUST Library における収書制度について詳しくご説明いただいた。HKUST Library では、蔵書構築の方針の決定や、資料費の予算獲得・配分、予算執行状況の監視は、図書館長や各部門の Head がメンバーとなっている Collection Development Committee という委員会が行っている。もし教員が新規の電子ジャーナル購読を希望する場合は、まず所属学部に申請して学部長の承認を得てから、この委員会で検討する。また、アクセス統計などを調査して、購読のキャンセルも検討している。なお、収書の優先度は、HKUST の学部構成と同様で、科学・技術と経営分野が高く、医学・臨床系や人文科学の優先度は低い。

2013/14 年の図書館予算の資料種別配分

図書	電子ブック	11.6%
	冊子	6.9%
雑誌	電子ジャーナルのみ	57.4%
	電子+冊子併用	0.5%
	冊子のみ	1.3%
データベース		19.8%
AV などの他のメディア資料		2.5%
合計		100.0%

(説明時に見せていただいた ppt の数字をもとに、筆者が作成)

理工系の図書館ということで、電子ジャーナル購読が最も大きな割合を占めているのは当然だろう。購読契約は、香港 8 大学のコンソーシアムである JULAC を通じて版元に交渉した価格で行われている。表にあるように、冊子の図書の割合が全体の 6.9% と非常に小さいことに驚いている。見学した他の図書館以上に電子メディアの比率が高くて、図書・雑誌を合わせた電子・冊子の比率は大まかに 9 対 1 である。

さて、Wong 氏の説明のメインは、電子ブックの選書・購入手段として採用している下記の 3 種類のシステムの紹介だった。説明時に見せていただいた ppt のレジュメはいただけなかったが、その後 Wong 氏や図書館長を含めた 4 人の共著で 2014 年に専門ジャーナルに掲載された HKUST 図書館での取り組みについての論文をいただいた³³。ちなみに、2013/14 年における電子ブックへの支出は、HKUST 図書館全資料費の 11.6% で、冊子の図書の 2 倍である。

³³ Kwak, C.S.Y., et.al. (2014), Demand-driven acquisition at HKUST library: the new normal. *Interlending & Document Supply*, 42, 153-158. [DOI: 10/1108/ILDS-09-2014-0046]

➤ **Ebrary DDA (Demand-Driven Acquisition)**

HKUST 図書館では、数社の DDA システムを検討した結果、HKUST 図書館に創立以来図書・資料を納入しているアメリカの図書取次業者 YBP (Book Jobber と Wong 氏はおっしゃっていた) を介して、2012 年 10 月に Ebrary 社の DDA を導入した。その仕組みを簡単に説明すると、Ebrary が提供している全タイトルから HKUST が設定した条件 (例えば、「2010 年以前に出版されたものや、225USD (米ドル) 以上の高額の本を除く」など) を満たした電子ブックの書誌データを YBP が HKUST の検索システムにアップロードして、利用者が検索して 10 ページ以上閲覧する、あるいは印刷かダウンロードしたタイトルを自動的に購入するのである。導入以降 2014 年 6 月までの時点で、22,000 以上の電子ブックのデータが HKUST の検索システムに追加され、その内約 3,000 タイトルに何らかのアクセスがあって、自動的に購入されたものは約 1,400 タイトルである³⁴。

➤ **Joint JSTOR DDA**

Ebrary の DDA 導入前から、JULAC コンソーシアムで Joint JSTOR DDA にも参加している。これは、香港 8 大学の学生などのアクセスやダウンロードの実績に基づいて JSTOR 社が提供する電子ブックを共同購入・利用するシステムである。HKUST ではほとんど選書されない人文科学系の本が他大学の利用者から選ばれることはメリットではあるが、最近の利用統計では HKUST 構成員の利用実績は 8 大学で最も低く、実際はこの DDA の恩恵はあまりないと HKUST 図書館は認めている³⁵。

➤ **Wiley EBA (Evidence-Based Acquisition)³⁶**

Ebrary DDA via YBP 導入後 1 年半ほどの間に購入された電子ブックの出版社を調べたところ、理工系に定評がある学術出版社の Wiley のタイトルが全体の約 25% を占めていたことが判明したので、2013 年 5 月に Wiley が提供している Usage-Based Collection Management (UBCM) という EBA を導入した。15,000 タイトルを超える Wiley の電子ブックが図書館の検索システムから閲覧できるようにしたところ、2013 年 12 月末までに 22 万弱の Chapter がダウンロードされた。その利用実績に基づいて、図書館が価格や蔵書構成など他の要因などを加味して精査したうえで、318 タイトルを購入して、恒常的に利用提供している³⁷。なお、このシステムでは、Ebrary DDA と違って、2010 年以前に出版されたタイトルも含まれているので、2001 年から 2010 年の間に出版された図書にもかなりアクセスがあった。

³⁴ Ibid, p.154.

³⁵ Ibid, p.156.

³⁶ Wiley の電子ブック選書システムについては、先に訪問した香港理工大学(PolyU)では“Wiley DDA”と呼んでいたが、HKUST では“Wiley EBA”と説明を受け、上記論文にもそのように書かれていた。この報告書ではそれに倣ったが、PolyU が導入しているものと同じシステムだと思われる。

³⁷ Ibid, p.155.

HKUST では Ebrary DDA と Wiley EBA を相次いで導入してから、電子ブックのアクセス件数が急激に増加するようになった。また、利用者が求める電子ブックを購入することができるようになったことで、限られた資料費の有効利用になっている。



IC内グループ学習室で講義を受ける参加者



エントランスで絵本の原画展が開催されていた

⑤ 学修支援（利用教育、e-learning、情報リテラシー教育の取り組みなど）

HKUST 図書館の Reference & Collection Services の Head である Victoria Kaplan 氏から、同館で提供している利用教育のプログラムや e-learning の教材作成などについて説明していただいた。Kaplan 氏はアメリカ人だが、長らく香港にお住いの方である。

この部署では、Kaplan 氏を含めて 8 名の Professional Librarian と 3 名のサポートスタッフが、次のような業務を担当している。

➤ Reference & Information Counter Services

Information Desk におけるレファレンスサービスに加えて、電話やメール、SNS アプリの WhatsApp を介した利用相談に対応しているが、受付件数は年々減少しているらしい。また、教職員と大学院生には、個別の Research Consultation を求めに応じて提供しているが、件数はそれほど多くはない。

➤ Information Literacy Instruction

新入生への図書館オリエンテーション、学部や教員との連携で実施している授業の内容に関連した講習会や、各種ワークショップの企画と実施。e-learning 教材の作成や提供など。詳細は後述。

➤ Collection Development

8 名の Professional Librarian の内、1 名が Collection Development & Service Manager として、④蔵書構築や収書 で紹介した業務を主に担当して、7 名は Subject

Librarian として各学部・研究科での研究や教育に関連した学術情報の収集や提供を行っている。

➤ **Electronic Information Services**

HKUST 図書館のホームページで提供している 150 種類を超える Research Guides の作成³⁸や、データベースの選定や評価を行っている。

➤ **Outreach Service & School Liaison**

教職員や学生に図書館のサービスや蔵書を広報する活動として、①図書館概要 の最後で紹介した”Collection Highlights”と”Readers Alert”の作成と発信を定期的に行っている。これらは、Professional Librarian たちの間でローテーションを組んで、その月に担当になった人がトピックの選定から紹介する図書や雑誌記事の選択などすべて行っている。これらのコーナーはもちろん HKUST 構成員がターゲットであるが、図書館ホームページから誰でも閲覧できるため、まさに Outreach と言えるだろう。

また、学内外から著者を招待してブックトークを館内で開催するなどのイベント企画も行っている。見学した時には、エントランスで HKUST 卒業生が出版した絵本の原画展をしていた（前頁の写真）が、その作者のブックトークを 2015 年 2 月に開催する予定である。

学部連携に関しては、先述の授業に関連した講習会の実施などがあげられる。

➤ **Library Projects& New Initiatives**

図書館の利用促進やアウトカムの測定のために、図書館単独あるいは学内他部署との連携で、各種 Assessment（アセスメント・評価）を実施している。

さて、本題の Information Literacy Instruction について、2013/14 年には次のようなプログラムを実施した。Professional Librarian8 名が手分けして内容の立案から講師役まで務めた。Kaplan 氏は「年度初めは毎日学生の前で話をすることで忙しいけれど、私は教えることが好きだからこの仕事が気に入っている。」とおっしゃっていた。

• **Orientation**

新入生向けの図書館オリエンテーションで、学部新入生対象には 1 時間程度の図書館案内ツアー、大学院新入生向けにはツアーを含めた図書館利用オリエンテーションを開催している。2014 年の秋には初めての試みとして、学部新入生が館内案内ツアーに

³⁸ HKUST Library, “Guides to Resources-LibGuides Homepage.” <http://libguides.ust.hk/home> [accessed 2015.1.23]

参加した後で、本を借りたり、図書館の Facebook を訪問したり、図書館の印象をポストイットに書いてラーニング・コモンズのガラス壁に貼り付けるなど 5 つのタスクを完了したら、アイスクリームをプレゼントというレクリエーション感覚のプログラムを提供した。その目的は、「とにかく図書館を好きになってほしい」に尽きることである。

- **Course Specific Classes**

授業内でレポートなどの課題に取り組むために必要な情報検索などを指導する講習を、学部あるいは教員個人からの依頼により実施している。そのために Professional Librarian が用意したレジュメは、その後 Research Guides に追加されてホームページで公開されている。学部生・院生両方の授業に対応しているが、特に Center for Language Education との連携で学部生のクラスが多く、これらのクラスには 2013/14 年に 128 回実施して、3,427 名が参加している。

- **Subject Specific Workshops for post-graduate students(PG)**

Office of Post-Graduate Study が大学院生向けに提供している Professional Development Courses の一環として、図書館が”Searching Research Literature Effectively”と”Academic Integrity & Intellectual Property”という 2 つのワークショップを提供している³⁹。Kaplan 氏によると、後者が特に重視されて、院生に受講を義務付けている大学院が増えている。

- **Open Workshops**

HKUST の構成員なら誰でも出席できるワークショップで、Professional Librarian 自身が講師を務めるだけでなく、外部講師や出版社の担当者に依頼することも多い。企業情報の探し方、文献管理ソフトの使い方、大学院進学・留学のための情報ソースの紹介などさまざまなトピックにわたっている⁴⁰。

このようなプログラムがどのくらいの実績を挙げたかについては、説明時に提示された数字を次の表にまとめてみた。

³⁹ HKUST Library, “Services and Information-Library Instruction for PG students.”
<http://library.ust.hk/serv/pgorient.html>[accessed 2015.1.23]

⁴⁰ HKUST Library, “Services and Information-Library Classes: Open Workshops.”
<http://library.ust.hk/serv/openworkshops.html>[accessed 2015.1.23]

HKUST 図書館における利用教育プログラム実績(2013/14 年)

	Orientation	Course Specific	Workshops for PGs	Open Workshops	その他	合計
実施回数	55	175	22	34	3	289
参加者数	1,236	5,097	426	721	44	7,524

参加者数は延べ人数である。また、Open Workshops 以外のプログラムの参加者の内訳は、学部生(UG)が延べ 5,163 名、院生(PG)が同 1,640 名である。



Kaplan氏の講義を受ける参加者



Information Counterでレファレンス質問を受付

利用教育プログラムとしては、ここまで述べた対面のものだけではなく、HKUST 図書館では e-learning 教材を積極的に導入するようになった。HKUST が理工系に強みのある大学で、アジアで最初にオンライン講義である MOOCs(Massive Open Online Courses)を開講したこともあり、大学が e-learning を重視する方針であるため、図書館もそれに同調したという経緯がある。実際、2012 年から大学が 4 年制になって学生数が増えたため、従来のオリエンテーションや講習会、ワークショップだけでは対応しきれない事情もあった。それだけでなく、対面(face-to-face)指導の事前準備や復習にも e-learning を活用できるので、両方を併用することのメリットは大きいと Kaplan 氏はおっしゃっていた。つまり両方受講することが最も効果的だが、講習会に参加しない学生も多いので、e-learning 教材や Research Guide だけでも学べるように工夫している。

講習会と e-learning を併用している例として、学部新入生の必修科目である LANG1002 English for University Studies I と工学系学生の 2 年次の必修科目 LANG2030 Technical Communication I の教材などを詳しくご紹介いただいた。LANG1002 では、大学に入って初めてのレポート(expository essay)を書く課題が出るので、そのためにまずは Professional Librarian が授業時に講習会を実施する。必修科目なのでクラス数が大変多く、全クラスに講習会を 1 回実施するだけではカバーできない項目があり、講習会の内容を後から学生自身が確認するためにも、e-learning 教材も併せて利用している。HKUST 図書館ホームページ

ジの LibGuide の中にこの授業の専用ページを設けて、講習会のレジュメをアップするだけでなく、レポート作成の過程 (Analyze Needs & Get Ideas→Mind Mapping→Evaluate Information Sources→Find Articles→Cite Sources) ごとに必要な情報や助言を記し、ディスカバリーシステムの検索のやり方や APA スタイルでの引用ルールなどを説明した短い e-learning 教材を載せている⁴¹。LANG2030 も同様で、こちらは工学専攻の学生が対象なので、工学の Subject Librarian が教員側と事前に打ち合わせて講習会のフレームやポイントを決め、各クラスの講習会の担当者がその範囲内で自分のスタイルでレジュメを作成して講習会を実施する。ここでも同様に、論文や特許を検索する方法や情報源などを LibGuide の専用ページに掲載していて、IEEE スタイルでの引用方法の e-learning 教材も見ることができる⁴²。

e-learning 教材の作成チームは、4 人のレファレンス担当 Professional Librarian に加えて、システム担当 Professional Librarian が 1 名、さらにアシスタントとして学生 3 名を各週 10 時間雇用している。学生アシスタントの業務は、Professional Librarian たちがシナリオを考えたトピックについて、e-learning 教材を Flash か HTML5 で作成することである。できあがった教材は Professional Librarian たちがチェックして、修正させている。なお、動画のナレーションはコンピュータの音声を用いていて、イギリス英語やオーストラリア英語などが選べる。コンピュータの音声にするメリットは、スクリプトを修正すると自動的にナレーションも変更されるので、人間の声を利用したときのように録音のやり直しや編集の必要がないことである。音声や動画の作成にあたっては gender-free を特に意識していて、例えば「質問役」と「回答役」が登場する場合にはそれぞれ男女半々となるように気を配っている。なお、e-learning の教材には”How to…”が多いが、ゲームも複数作成されていて、例えば”Citation Challenge”という文献情報の各要素を並び替えて正しい引用スタイルにするものなどがある。e-learning 教材は、CityU 図書館でも同様の話があったが (p.42 「⑤学修支援」を参照)、長すぎると学生が飽きてしまうので、せいぜい 2 分、長くても 4 分程度にしている。

これらの e-learning 教材は図書館ホームページのトップから”e-learning Videos & Games”に入ると一覧で確認できる⁴³が、より多くの学生に見てもらえるように YouTube に図書館のチャンネルを持っていて、そこにワークショップの動画などとともに e-learning 教材もアップしている⁴⁴。新しい教材をアップするたびに全学生にメールで知らせるなど、e-learning 教材の広報にはさまざまな手段を講じている。

最後に、学生の情報リテラシー育成への取り組みについてご説明いただいた。HKUST

⁴¹ HKUST Library, “Guides to Resources-LANG1002-English for University Studies I.” <http://libguides.ust.hk/lang1002> [accessed 2015.1.23]

⁴² HKUST Library, “Guides to Resources-LANG2030-Technical Communications I.” <http://libguides.ust.hk/lang2030> [accessed 2015.1.23]

⁴³ “eLearning@HKUST Library”. <http://lbcone.ust.hk/elearning/> [accessed 2015.1.23]

⁴⁴ “HKUST Library Video Gallery”. <https://www.youtube.com/user/HKUSTLIB> [accessed 2015.1.23]

図書館では、大学からの求めに応じて、2008年に **Information Literacy Learning Outcomes (ILLOs)** という図書館が提供する情報リテラシー教育プログラムの目標を設定した。これまで紹介した利用教育プログラムや **Research Guides**、**e-learning** 教材の提供は、すべてこの目標を実現するための手段となっていて、これらのプログラムにより「学生が〇〇できるようになる」というアウトカムを重視している。講習会では特に受講前と受講後で学生の知識や意識がどのように変化したかを確認するため、最後にアセスメントを実施している。例えば先に紹介した **LANG1002 English for University Studies I** クラスの講習会では、アウトカムとして、

1. 研究トピックを分析し、キーワードから発展させていくことができる
2. データベースを使って、授業の課題に応じた論文を見つけることができる
3. 異なるタイプの情報源を特定し、記述することができる⁴⁵

を挙げていて、受講後のアセスメントとして各学生にどの程度この目標に到達できたか選択肢や記述で回答させている。

このような講習会ごとのアウトカムだけでなく、長期的に学部 4 年間で情報リテラシーの習熟について、外部指標を導入して入学時と卒業時の変化を測る試みもされている。**HKUST** の利用教育プログラムや **e-learning** 教材は、ただ数や種類を増やすことで満足するのではなく、それらが学生の情報リテラシー能力の育成にどのように影響を及ぼしたかを重視した“**Outcome-Based Library Instruction**”を目指しているのである。

⑥ 所感

2013 年度海外集合研修の訪問時よりも、我々 2014 年度海外集合研修は各大学での滞在時間が長かったため、**HKUST** でもゆっくり館内を説明を受けながら見学し、1 時間半以上の長い講義を 2 回受け、さらに担当の方に質疑応答する余裕があった。そのため、事前に質問を送付していた電子メディアの購読と利用教育などの学修支援についてかなり深いところまで話を聞くことができたことに感謝したい。

HKUST の学生数や図書館の蔵書数は、研修参加者 3 名がそれぞれ勤務している大学や図書館の規模よりも小さい。レファレンスや利用教育を担当する図書館の体制も人数だけではほとんど変わらない。しかし、1 年間に提供しているオリエンテーション、講習会、ワークショップの実施回数の多さや凝り方、**e-learning** 教材の種類や件数、ホームページ上にアップしている **Research Guide** の種類の豊富さ、などどれをとっても圧倒されてしまった。この違いはどこからきているのかの答えを見いだせないままに、**HKUST** 図書館の取り組みを先行事例として、自館でも手を付けられそうな事から取り組んでいきたいと前向きな刺激を受けた。

⁴⁵ Kaplan 氏が紹介された英語の項目を日本語に訳した。

IV. 謝辞

2014 年度海外集合研修で香港の 4 大学図書館を見学し、Professional Librarian の方々から講義を聴き、ディスカッションをする機会を与えられたことを、我々3名は大変感謝している。香港で見聞したことは我々にとって示唆に富んだものであり、大きなモチベーションを与えられた。その成果をまとめたこの報告書が、私立大学図書館協会加盟館で図書館業務に従事している方々が香港の最新の図書館事情を知る一助となることを願っている。

末筆ながら、香港大学との調整にあたっていただいた私立大学図書館協会国際図書館協力委員会委員長の金東溟氏、委員の方々、国際図書館協力委員会事務局のご担当者、ならびにお忙しいところ我々を温かく迎え入れてくださった香港の 4 大学図書館の図書館員の方々に心から御礼申し上げたい。